

134.83-C25-2㊦



1200500726189

134.83
25



始



134.83
C25
2



矢田部達郎譯

カ
ツ
シ
ラ
ア

言語

— 象徴形式の哲學 第一 —

東京 培風館發行



134.83
C25
2

134.83
C25
2

920
12

譯者序

カッシラアの「象徴形式の哲學」は人間文化（客觀精神）の構造を一つの原理から統一的に理解せんとした試みで、三部に分たれ「言語」「神話」「認識」を取扱つてゐる。この三者は人間文化の代表的なものとして取上げられたのであつて、その他道德、藝術等も當然この同じ立場から考察せらるべきものと思はれる。これらの人間文化は素より各自に特有の法則によつて支配せられるが、併しそこにはこれらを通じて働くところの一つの根本的な原理を見出すことができる。かゝる原理となるものが彼れの所謂「象徴」の概念である。言語が或るものに名を與へるときそれは「既に在るもの」に名を附加すると云ふのではなく、名を與へる働きと同時にその或るものが成立する。認識の領域に例を採るならば、白い色の知覺は白い色があつてそれを人間が知覺するのではなく、

人間知覺の體系全體によつて始めてそこに白い色の存在が可能になる。赤の知覺もなく青の知覺もなければ白がどうして知覺せられるであらうか。この意味に於て白い色は人間的知覺の働きと同時に成立すると云はなければならぬ。名は「もの」の表現であり、「もの」は名によつて表現される。「もの」があつてその「もの」の表現として名が後から附加されるのではない。それは一つの表現と云ふ働きのうちに名も「もの」も同時に創造される。かくの如きは表現するものと表現せられるもの、象徴するものと象徴せられるものとの全體的相關々係を想定するのでなければ到底これを理解することができないであらう。かかる働きを彼れは「象徴機能」と名け、かゝる關係の形式を彼れは「象徴形式」と名けたのである。

象徴機能は凡ゆる人間文化に通ずる原理であつて、かゝる機能を明かにすることによつて我々は人間文化の構造を総合的に理解することができる。素より

各文化形態にはそれに獨特の法則（内的形式と云はれる）がある。かゝる法則を特にその發展の相に於て顧慮しつつ、人間文化に對する綜合觀を獲得せんとするのが實にこの「象徴形式の哲學」の企圖に他ならぬ。各領域に於ける個別的法則の理解は彼れの専門外であつて、そこには或は不當なる見解も見出されるやうに思はれるが、併し各領域の専門家達が逆に文化全體に對する綜合觀を熱望してゐる現状に於ては、この著作の紹介は必ずや學界に何等かの寄與をなしうることと思ふ。特に第一卷「言語」は言語哲學上の名著としてこの問題に關心を有するものゝ必讀の書であることは夙に定評のあるところである。

「象徴形式の哲學」全三卷は千數百頁の大冊であつて、さなきだに難解な哲學用語を以てこれを逐字譯することは害あつて益なきことであるから、譯者は大膽にそのエッセンスを把握して譯者自身の言葉を以てこれを再現することにした。原著者が必要としたよりも少き語數によつて原著者が云はんとするこ

ろの凡てを云ひ盡すことは原著者よりも優れたる才能の持主によつてのみ可能である。譯者はかゝる才能を以て自負するものではないが、尠くとも原著者の云はんとする價值あるものゝ一小部分でもが讀者に傳達せられぬことがないやうにと心がけたつもりである。

昭和十六年五月

福岡にて

譯者

目次

緒言……………一

序論 問題の設定……………五

一 象徴形式の概念とその體系……………五

二 記號の一般機能——意義の問題……………三

三 代表の問題と意識の構造……………三

四 記號の觀念的意味——模寫説の克服……………三

第一章 哲學史上に現はれたる言語の問題……………三六

第一節 觀念論の歴史に現れた言語の問題……………三六

(Platon, Descartes, Leibniz)……………三六

第二節 經驗論の體系に於ける言語問題の位置……………四一

(Bacon, Hobbes, Locke, Berkeley)……………四一

第三節 フランス啓蒙哲學とケムブリッジ・プラトニスト (Condillac, Maupertuis, Didlot; Cudworth, Shaftesbury, Harris).....五十一

第四節 表情としての言語——「言語の起源」の問題
(Vico, Hamann, Herder, Romantik).....六〇

第五節 ウィルヘルム・フォン・フンボルト (Wilhelm von Humboldt).....六九

第六節 アウグスト・シュライヘル (August Schleicher)
——自然科学的言語觀への移行.....七七

第七節 現代言語學の成立——「音聲法則」の問題.....八三

第二章 感性的表現の相に於ける言語.....九六

第一節 表出運動としての言語——身振語と音聲語.....一〇六

第二節 擬態的、類推的及び象徴的表現.....一〇三

第三章 直觀的表現の相に於ける言語.....一二三

第一節 空間及び空間的關係の表現.....一二三

第二節 時間表象.....一三三

第三節 數概念の言語的發達.....一三八

第四節 言語と「内部直觀」の領域——自我概念の諸相.....一四四

一 言語的表現に於ける「主觀性」の發達.....一四四

二 人稱的及び所有的表現.....一五八

三 言語的表現に於ける名詞型と動詞型.....一六三

第四章 概念的思惟の表現としての言語——言語的概念構成
並びに類構成の形式.....一七三

第一節 性質的概念構成.....一七三

第二節 言語的類構成の根本方向.....一九

第五章 論理的關係形式の表現としての言語——關係概念.....二〇二

緒言

この著作の構想は前著「實體概念と機能概念」にその端を發する。前著は主として數學的自然科學的思考の構造を取扱つたものであつたが、その後著者はその結論を精神科學の領域に適用せんと努力せる結果、そこでは從來の認識論的な立場が狭きに失することを痛感するに至つた。精神科學の方法論にとつては單なる科學「認識」の諸前提を研究するのみでは不充分であつて、それ以上更に世界「了解」一般の根本諸形式を明かにすることが必要である。從來の認識論は主として客觀即ち認識對象の構成を明かにせんと欲したけれど、それと並んで更に主觀即ち精神の表現形式に關する學が打立てられなければならぬ。この著作の第一卷はかゝる形式としての言語を取扱ひ、第二卷は神話的宗教的思考の形式を、第三卷は認識プロバアたる科學的思考の形式を取扱はうと

するのである。

言語を純哲學的内容として取扱ふと云ふことはフンボルト以來何人もこれを敢へてしなかつたところのむしろ一種の冒険であるとさへ云はれるであらう。

フンボルトは千八百五年ヴォルフに與へた書簡中に於て言語は凡ゆる世界を馳け廻る哲學的運般車であると云つたが、その後言語研究が進むに従つてこの種の考へ方は影をひそめ、言語の哲學的基礎付けは常に言語の心理學的研究に俟たねばならぬと考へられるやうな氣運が盛んになつて來た。シュタインタールやヴントは云ふに及ばず、マルティに於ても亦その言語哲學の成立は純心理學的手段に訴へることによつてのみ可能であると考へられたのである。従つて言語研究の領域に於ては心理主義實證主義が、誓へカール フォスラアの如き例外はあるとしても、一つの教義であるかの如き觀を呈するに至つた。素より哲學的觀念論者達はかゝる傾向に反對する。併しながら彼れらに於てさへそれが

フンボルトに於て見られるやうな自律的な地歩を堅持することはもはや不可能であつた。クローチエに於ても亦コーヘンに於ても言語は美學の一部門として取扱はれてゐるに過ぎないのである。

かくの如き時代に於てはこの著作も亦かゝる一般的情勢を無視することはできない。従つて我々はこゝに從來言語研究の領域に於て問題となつたところのものを系統的な一般性に於て叙述し、その答を経験的な研究に究めると云ふ方法を取らざるを得なかつた。併しながらこゝに與へんと欲するところのものは決して個々現象に關する研究的所見ではなく、諸現象に通有せる一般的聯關である。換言すればこの著作の特徴は言語の純粹形式に關する「記號學」たらしめるところに存するのである。

千九百二十三年 四月

ハンブルグにて

エルンスト カツシラア

序論 問題の設定

一 象徴形式の概念とその體系

哲學的思索は存在の概念から出發する。多くの存在のうちに統一を求める心から始めて哲學的な世界觀が發生したのである。かゝる統一に對する原理は永く存在そのものうちに求められた。即ち「原質」なるものがそれである。その後哲學の潮流は漸次これを觀念的なものに求め、且つそこに「原理的」性質を加味するに至つた。ピタゴラスの數、デモクリトスのアトムの如きはその階梯に横るものと云ふことができる。然るにプラトンの觀念論に至つて始めて存在の「根據」は個々の存在を離れて純原理的なものうちに求められるやうに

なる。彼れの關心はもはや單なる存在の構造にはなく、存在概念の意味に向けられた。存在は事實としてではなく、むしろ課題として與へられるに至つたのである。

この傾向は併しながら哲學の領域のみに限らず、個々科學の歴史に於ても亦同様にこれを認めることが出来る。事實から法則へ、法則から原理へと向ふのみが科學的思惟の道程ではなかつた。法則も原理も科學的研究の後の段階に於ては再度課題として再吟味せられなければならぬ運命を荷つてゐる。科學の對象は單なる事實ではない。事實は科學的思惟の出發點であるよりはむしろその目的地である。科學が使用する根本概念も亦存在の單なる模寫ではなくむしろその象徴である。この科學的手段の象徴的性質が始めて明かに意識されたのは數學的物理的認識に於てであつた。ヘルツ (Heinrich Hertz) はその「力學の原理」(1894)に於て自然認識の最も重要な課題は未來の經驗を豫見するとこ

ろにあるが、かゝる目的を達成するためには我々はその手段として對象に關する象徴を形成しなければならぬと説いた。象徴は併しながら對象の凡ゆる性質の模寫である必要はなく、我々がかゝる象徴について思惟必然的な推理をすれば、それがその象徴に相應する對象の自然必然的な歸結に合致すると云ふ關係が、或る一定の視點に於て成立すれば足りる底のものである。従つて例へば物理的象徴が形成せられるためには、かゝる視點を保證するものとして既に或る種の物理的體系が豫想されてゐなければならぬと云ふやうに考へられたのである。

かく象徴の形成が特定の視點によつてのみ始めて可能であると云ふことから凡ゆる科學は單に對象の特定の方面のみを解明し得るに過ぎないと云ふことが約束せられてゐる。一つの象徴は對象の、それが媒介する一側面のみを明かにし得るに過ぎない。従つて異なる構成を有する象徴によつて成立する諸科學は各

各異る對象聯關に對應し、例へば物理學的對象と化學的對象、化學的對象と生物學的對象等の間には何等直接關係を考へることができぬと云ふことになる。かゝる事態は哲學的思索の出發點たる存在の統一と云ふことが、科學的思索の道からは決してこれに到達することのできぬものであることを示唆するのである。こゝに於て哲學は存在の統一に對する憧憬を捨て、むしろ象徴形式の統一を企圖しなければならぬ。實體の一樣性を求めることをやめ、機能の一樣性を求めなければならぬ。而してかゝる機能にして苟くも一樣性を示すものであるならば、我々はそこにかゝる機能の一般條件を探究してこれを支配する原理を確立し、これによつて精神活動一般の統一性を明かにすることができざる筈である。然るに精神活動は自然科學的認識のみに止らず、藝術も神話も宗教も夫々それ獨特の機能によつて成立するのである。これらは認識と同様に何れも單なる對象の模寫ではなく、各々異なる様式に於てそれ自身の世界を形成する。換

言すれば異なる様式に於ける精神の客觀化であり、又その自己啓示である。藝術、言語、神話、認識をかゝる意味に解し、それらに通ずる原理を明かにするならば、我々はそこに精神科學の哲學に至る新しき道を發見することができるであらう。

カントが理論哲學の領域に於て成し遂げた「思惟活動の革命」と云ふのは、從來認識と對象との間に存すると考へられた關係を顛倒することであつた。併しながら彼れがその先驗的分析論に於て取扱つたところは凡ゆる客觀を包含するわけではなく、多様な客觀中、科學特に數學的物理學的な根本法則に表はされた論理的合法性だけに限られてゐた。然るに精神活動の全領域をかゝる對象に限定することの狭きに失すると云ふことは、彼れ自身既に漸次實踐的理性を論じ又美的乃至目的々判斷力を論ずるに當つて明かにして行つたところである。かゝる漸次的なる展開こそ實にカントの批判的觀念論の特徴とも云ふこと

ができる。精神の全體性は單純なる型式として最初から設定せらるべきものではなく、批判的分析そのものによつて漸次に展開せらるべきものである。こゝにコペルニクスの轉向の新たな発展がある。機能が存在によつて理解せらるべきか、或は又存在が機能によつて基礎付けられねばならぬかと云ふことは、單に論理的判斷についてのみ云はれることではなくして、凡ゆる精神的形成に對して問はれなければならぬところ。精神活動の異なる機能に對しては、常に獨立に再度新しく機能の對象に對する優越が批判せられなければならぬのである。かくして理性の批判は文化の批判にまで發展する。純粹に認識形式の分析を志してゐる間は素朴實在論的な世界觀を脱出することが困難であるけれども、これに反して文化概念を出發點とする場合には我々はそこに包含せられる精神的生産的活動を見逃すことができない。ここでは客觀は精神の機能によつて設定せられ、Sein (存在) は Tun (活動) 以外の何物でもないことが發見

せられる。「世界の構造」といふことが問題ではなく、「世界を構造」と云ふことが問題とならざるを得ない。それは受動的な印象ではなく能動的な表出であり、與へられたる存在ではなく解決せらるべき課題であると云ふことがわかるのである。

こゝに於て哲學の任務は恰も近代の言語哲學が「内的言語形式」なるものを發見せるが如く、各文化形態に對して夫々異なる「内的形式」を發見し、且つそれらの間に統一的な體系を確立するところにある。内的形式の發見は素より個々現象に即してそこから抽象せられるものではあるが、併しながらそれは決して現象の單なる概括ではなく、むしろ個々現象の成立に對する不可缺なる構成法則であると云ふことを忘れてはならぬ。文化形態の批判と云ふことは哲學史上必ずしも新問題であると云ふことはできない。併しそれらに共通する缺點は一つの文化形態に妥當するところのものを直ちに文化全體に押し及ぼさうとす

るところにあつた。近代の觀念論哲學に於てかゝる代表的意義を與へられたものは實にかの認識形態に他ならぬ。既にデカルトがその「Resolucio」に於て哲學的方法を純粹思惟に求めたのを始めとして、後にヘーゲルにあつては彼れが精神を具體的全體として取扱はんと主張せるにも拘はらず、彼れの「精神の現象學」はその論理學への地盤を準備するものに過ぎなかつたのである。

素よりこの論理的なるもの、偏重は哲學、特に觀念論的哲學の概念とは不可分の關係にあるもの、如くにも思はれる。何となればかゝる論理的形式による統一がなければ凡ゆる哲學的體系は不可能であらう。今若し逆に經驗論の主張するところに従ふならば凡ゆる文化形態は單なる並存關係を示すのみとなり、言語の歴史、宗教の歴史、神話の歴史、藝術の歴史、更らには認識の歴史が個々別々に成立するとしても、そこには何等體系的なコスモスの成立を見ることはできないであらうとも考へられるからである。こゝに我々は方法的なディレ

ムマに置かれると云へる。論理的統一を志すならば個々領域に於ける特徴を見失はなければならぬ。個々領域に於ける特徴に忠實ならんと欲すれば一般性を斷念しなければならぬ。このディレムマを切抜けるためには我々は凡ゆる精神活動に共通であり、而も何れの精神活動に於ても全的には同一でない一つの契機を見出す必要に迫られる。かゝる契機かゝる媒質が発見せられるならば、かの先驗的批判が純粹認識に對して成し遂げたところのものを凡ゆる精神形態の全般に亘つて適用して行くことができる。我々は次に果してかゝる契機かゝる媒質を見出し得るか、又若しかゝる契機かゝる媒質が存するならばその性情は如何なるものであるかについて考察して行かうとするのである。

二 記號の一般機能——意義の問題

こゝに於て我々は再度ヘルツが物理學的認識の立場から説いたかの象徴の概

念に立ち歸つて考へる必要に迫られる。彼れにあつては物理學が使用する諸種の概念例へば空間、時間、質量、力、質點、エネルギー、アトム、エーテル等は何れも認識が感性經驗の世界を支配せんがために創作するところの記號若くは「假象」であつて、これらは直接的には如何なる感性的資料にも對應するものではないと考へられた。かく物理學を記號の體系と考へる考へ方は既に「自然の書」を數學的言語によつて著はさんとしたと云はれるガリレイに於ても認めらるるところである。その後ライプニッツに至つてこの考へ方は最も明かな形をとり、彼れの「普遍的記號學」は一種の記號的論理學を主張するやうになつた。彼れに於ては事象の論理は記號の論理から引き離して考へることはできない。何となれば記號は思想の單なる上包みではなくその必然的本質的な機關だからである。凡ゆる正確なる思惟は象徴體系にその足場を置かなければならぬ。自然法則は我々の思惟に對して常に一つの一般的型式として與へられるのである。

るが、かゝる型式は記號の結合以外の何者でもない。従つて物理的法則は數學に於けると同様に普遍的記號の體系を豫想することなしにはこれを考へることができない。こゝに一般は特殊のうちに直觀せられ、特殊は又常に一般に於て思惟せられると云ふかの認識の大原理が最も明確な形で現はれるといふことができる。

この相互規定の關係は單に自然科學の領域にのみ限定されるものではなく、凡ゆる精神活動の根本形式に對しても妥當する。かゝる根本形式はそれに相應する感性的基柢を見出すに至つて始めてその機能を充分に發揮することができるのである。精神の内容はその發表に於てのみ視ふことができる。觀念的形式は感性的記號によつてのみ表現せられる。かゝる表現の型を見出し且つその體系的通觀を得るならば、そこにライプニッツが認識に對して呈起した「普遍的記號學」の理想を精神活動の全般に亘つて實現することができらうであらう。か

くの如きは言語に、藝術に、神話に、宗教に又認識に、共通するところの象徴的機能に關する一種の文法とも稱すべきものである。

かゝる文法の概念は觀念論の傳統的問題領域以上の或るものを包含する。觀念論は *mundus sensibilis* (感性的世界) に對して *mundus intelligibilis* (知性的世界) を對立せしめ、前者を受動の世界とし、後者を能動の世界として區別する。然るに我々がこゝに提唱する「普遍的記號學」に於てはかゝる區別はもはや絶對的であることを得ない。感性的世界と知性的世界との間には不可分の相關々係が成立すると考へられるからである。知性は感性的のうちに於てのみ具現せられ、感性は又知性の根據に於てのみ成立するとすれば、かの形而上學的二元論は結局克服せられなければならないものである。而も我々の立場に於ては既に感性的なものうちに、働きとその反働とが區別せられ、又表現の相と印象の相とが區別せられる。獨斷的感論の缺點は知性を等閑視するのみなら

ず、感性そのものをも亦その印象の相に於てのみこれを眺めようとするところにある。然るに感性は單なる受働ではなく、そこには感性的な「活動」と云ふものを認めなければならぬ。精神活動の凡ゆる領域に於て、この感性的活動がその内在的過程の運搬者として働いてゐる。單なる知覺の世界以上にこれが象徴の世界を構成してゐる。かゝる世界は感性的な色彩を多分に保有するけれども而もそれは單なる所與ではなく、自發的構成作用たる感性的活動の基礎の上に成立するのである。言語構成の過程に例をとるならば、直接印象の渾沌から命名作用と云ふ言語的表現の機能によつて全く新しい言語的象徴の世界が構成される。かゝる世界は單なる印象の世界ではなくそれは精神的な分節を備へてゐるのである。これを構成するものは感性的性質と云ふよりはむしろ思想的性質であると云はなければならぬ。かくて言語は單なる感覺の世界を直觀の世界、表象の世界にまで引き上げる一つの精神的な手段となることが出来る。同

様に又神話も藝術も各々一つの象徴世界を構成する。それらは單なる印象の聚積ではなく精神的な活動の所産なのである。それらが非現實的に見えるのはむしろかゝる精神的な活動の自發性自由性を反映するからに他ならぬ。而もかゝる自發性自由性なるものも決して單なる氣紛れや遇然ではなく、そこには立派に統一的な構成法則が支配してゐる。従つてこれらの世界は精神が感性的な材料を通してその本質を合法的に表現するものであると云ふことができるのである。

かくて感性的象徴なるものは一方には又そのうちに客觀性乃至價值性の要求をも包含する。單なる心的内容は一度意識から消失すれば二度と再度歸來しない。象徴はかゝる意識的轉變に對して一つの據點を呈供するのである。象徴によつて始めて内容の多様に對する形式の一樣性が、又前者の個別性に對する後者の一般性が確立される。かゝる一樣性一般性を我々は記號によつて象徴せら

れる意味と名けるのである。従つて精神の内在的發展に際してかゝる意味の發生、客觀性の獲得は常に記號の成立と不可分の關係にある。素よりその初期の段階にあつては記號は内容の單なる再生に過ぎぬかの如き觀を呈するとも云へる。ヴント (Wundt) の如きは原始藝術を「回想の藝術」と名け、それは單なる印象の再生に過ぎぬと云ふ説をなした。併しながら如何に素樸なる藝術と雖もそこに自我の活動が參與せざる藝術と云ふが如きは考へられぬ。總じて記號の成立には自我の活動を必要とするのである。而して自我はその活動に際して益々深くそれ自らを反省し、そこに主觀的世界と客觀的世界との區別が確立せられる。フンボルト (Humboldt) によれば言語形成の材料たる音記號は主觀的であると同時に客觀的であり、兩者を結合する橋梁であると考へられた。何となれば音記號は一方には我々が能動的に發音するものであり、他方には我々が受動的に耳から受け入れるものだからである。即ち內的であると同時に外的

であり、主観的であると同時に客観的である。こゝに精神は言語によつて對象を把握するのみならず、又精神自らの構成法則を認識することができる。言語を單なる表情音と考へ、或は逆に單なる模擬音と考へる考へ方は何れも一方に偏した物の見方であつて、事實は兩契機の交互作用によつて自我と世界との綜合が營まれるところに言語の本質を認むべきであると主張せられた。かゝる事情は單に言語のみに限られるものではなく凡ゆる象徴の體系に妥當すると云へる。藝術に於ても純粹感情と純粹形象とが相交歡するところに新しき形式新しき意味が創造される。言語も、藝術も、認識も、神話も外的内的なる所與をその儘反映する鏡ではなく、それ自身が光源であり源泉である。相異なる精神的エネルギーは各々獨特な仕方にて各自の領域を決定し、各自の自我概念、世界概念を成立せしめる。従つて我々は精神活動の分析を企圖するに當つては獨斷的なる主客の分離に立脚すべきではなく、各活動に内在的必然的なる自我觀世

界觀の形式を探究し、然る後にこれら諸形式に共通するところの精神活動の根本法則を確立しなければならぬ。

三 代表の問題と意識の構造

言語、藝術、神話等の分析に際して我々に與へられる第一の課題は、感性的な個々内容が如何にして一般的な精神的意味の負荷者たりうるかと云ふことである。言語はこれをその感性的な材料から見ると多量の感覺の總和であるとも考へられる。併しそれが意味の代表であるためには諸多の感覺は一つの全體の意識に融合してそこに新しい性質を獲得しなければならぬ。同様の事は藝術品についても云へる。旋律は各音の總和ではなく一つの全體の意識として又新しい性質として藝術的な意味を再現するのである。かゝる全體の意識は常に或る視點即ち關係形式に従つて成立する。その最も根本的なものは空間の形

式であり、時間の形式であり、更らに物と屬性の形式であり、因果の形式である。感覺主義の哲學はこれらの關係形式を感性的印象の直接的內容から理解せんとした。例へば笛を五音吹き鳴らせば時間の觀念を生ずると云ふ。併しながら時間の觀念が成立するためには、各音は一定の關係形式、即ち時間的な關係形式の見地から把握されなければならず、従つて時間と云ふ關係形式はかゝる觀念の成立以前既に何等かの形に於て豫想せられてゐるのである。心理學的にも亦認識論的にも、かゝる關係形式乃至全體の性質は、感覺的性質と同様、他のものに歸着せしめ得ない原本的意識として無數に存在すると考へられる。然るに哲學的欲求はかゝる意識事實の單なる枚舉に満足することができない。プラトンが「ソフィステース」に於て「概念の共通性」の問題を呈出してよりこのかた、かゝる體系化の欲求は反復して哲學者の興味を刺戟したのである。形而上學的思辨哲學に於ては多くの關係形式はこれを唯一の根本原理から演繹す

ることができると考へた。然るに批判主義の哲學に於てはむしろ具體的な多くの關係形式から出發して各形式に獨特なる法則性を發見し、その交互的聯關を明かにすることによつて結局複雑なる關係形式に關する統一的體系に到達せんと努力するに至つた。

かゝる立場に立つとき我々は先づ諸關係形式に現はれる「性質」と「様相」との區別を明かにする必要に迫られる。關係形式の性質とは關係各項が意識全體に於て或る特定の法則に従つて配列せられる仕方を云ふ。例へば繼起とか並存とか云ふのがそれである。然るにかゝる關係の性質は異なる形式聯關に於ては異なる様相に於て現はれるのである。例へば物理學に於ける時間は音樂に於ける時間に對してその繼起と云ふ形式の性質に於ては同一であるがその様相に於ては異ると云ふが如きがそれである。様相を異にする性質は各意味聯關に於て異なる法則に支配せられる。従つて特定の關係形式を具體的に特徴付けるためには

我々は必ずその性質と様相とを同時に指示しなければならぬ。関係 $R_1, R_2, R_3, R_4, \dots$ は様相的指標 H_1, H_2, H_3, \dots を俟つて始めて具體的に規定することができる。意識に於ては一つの内容の設定は常に他の内容の全體的複合の同時的設定を必要とすると云ふことは意識そのもの、本質に屬すると云へるのである。カントは嘗て因果の問題を論じて、それは、或るものであると同時に他のものでなければならぬと云ふことは如何に理解せらるべきであるかと云ふ問題であると云つた。今獨斷的形而上學の立場に於けるが如く絶對的な存在の概念を出発點とするならばこの種の問題は解決の道を見出すことができない。然るに事實はむしろ逆であつて、認識の出発點は彼れらによつて非本質的なもの偶然的なものとせられた個別的意識である。内容と形式、要素と關係は元來獨立の規定ではなく相互規定の關係に立つ。凡ゆる個別的な意識的存在は何等かの形に於て意識全體が同時に設定せられ代表せられることによつてその規定性を獲得す

るのである。かゝる代表によつてのみ内容の所與性が成立し、かゝる再現に於てのみその現在が可能となる。今これを時間形式について考へて見よう。時間的現在是我々にとつては最も確實なる所與性を有すると考へられる。然るに一方これは過去と未來との間に永久に流動する限界たるに過ぎない。現在は實はかゝる限界を區劃する作用によつてのみ成立するのである。今若し現在を絶對的なものと考へるならば、結局時間の否定に終らなければならぬと云ふことはかの飛矢不動の論についてもこれを想見することができるであらう。事實はこれに反して、現在は時間形式の一契機として全體的過程と同時に設定される。かくて我々は存在のうちに非存在を見、所與のうちに非所與を發見する。これこそ一方には意識の主觀的統一と呼ばれ、他方には對象の客觀的統一と呼ばれる眞の統一態の概念に他ならぬのである。

空間の形式についても我々は同様にかゝる代表の根本機能を明かにすること

ができる。素より空間的全體の把握には同時的綜合をも必要とするが、かゝる同時的綜合は時間的綜合を俟つて始めて完成せられる。何となれば空間的全體が成立するためには先づその各要素が特定の規則に従つて繼時的に意識せられなければならぬからである。然るに一方單なる感覺の聯合的繼起からはかゝる空間的全體を理解することができない。全體は既に要素のうちに、又要素は既に全體に於て豫想せられてゐなければならぬのである。そこにはライプニッツの所謂「多の一に於ける表現」(multorum in uno expressio)と云ふ意識の根本規定が働くことを見逃すわけにはいかないであらう。

バアクレーは近代生理學的光學の出發點となつたその視覺說に於て空間知覺の發達を言語の發達に比較してゐる。彼れはそこで、恰も音記號が言語的意義を代表する如く、諸種の感覺的印象が空間的意義を代表することによつて空間知覺は可能になると説いた。併しながら彼れはその感覺主義的な立場からこれ

を單なる感覺の機能と考へたのである。然るに代表の機能は單なる感覺を超えて更らに概念的なもの、協同を考へることによつてのみ始めてこれを理解することができると記號は個別的感覺ではなくその背後には必ず記號の體系が豫想せられてゐる。一つの空間的表象は凡ゆる可能なる空間的方向のうちに始めてその空間的定位置を與へられる。従つて空間は與へられたる事物を容れる單なる器に比すべきではなく、むしろ觀念的な諸機能の綜合概念であると云はなければならぬ。時間的現在が過去と未來とによつて支持せられるが如く、空間的な「こゝ」は「かしこ」を離れては成立することを得ないのである。

時空と並んで我々は第三の統一形式たる物の結合形式を考へる。物の概念が成立するためには多くの感覺的性質が特定の仕方にかゝる空間的に配列せられることを必要とするのみならず、そこには更らにかゝる性質の負荷者となるものが考へられなければならぬ。従つて物は感覺主義者が主張するやうに感覺的性

質の總和ではない。ヒュームは自我をも知覺の束に過ぎないと主張したが、彼れは知覺概念そのものが既に自我概念をその成立條件として豫想するものであると云ふことを忘れてゐたと云はなければならぬ。それと同様に多くの性質から物の概念が成立すると云ふとき、これらの性質は單なる性質として物の概念に結合せられるのではなく、物の屬性として最初から一定の關係點、即ち物を何等かの形に於て豫想する。こゝでも全體は部分の總和として成立するのではなく、部分の設定はそれと同時に全體をその一般的構造に於て設定するのである。傳統的な心理學に於ては最近形態心理學が勃興するまでかゝる事情は全く説明せられずに放置せられて來た。そこでは聯合と云ふ概念が意識に於ける凡ゆる關係を包括するものとして用ひられた。然るにかゝる概念はそこに行はれる特殊的關係法則を明かにすることができない。關係は要素 a, b, \dots について $F(a, b)$ でも $\varphi(a, b)$ でもあり得るのである。而も關係が異れば要素 a, b, \dots も

亦同一ではない。むしろ獨立せる要素と云ふが如きは最初からこれを考へることができない。意識の綜合に於ては部分が全體を規定するのではなく、むしろ全體が部分を構成し、部分にその本質的な意義を附與する役割を演ずるのである。

この意義の獨立性に着目したのは實に認識に關する合理論の功績であつた。既にデカルトは客觀の統一は知覺に求むべきではなく精神の反省 (*inspectio mentis*) に求むべきであると主張した。たゞ彼れにあつては、意識は質料と形式とに二分せられ、形式は質料に對して外部から働きかける別個の活動と考へられた。外界に關する觀念は意識に與へられる繪畫であり、その統一はかゝる印象とは全く別個の「無意識的推理」と云ふ機能によつて營まれると説かれたのである。カントもその純粹理性批判の最初に於てはかゝる意味に於ける二元論の影響を免れることができなかった。唯彼れにあつては直ちに兩者の共同根

源に關する考へが擡頭してゐる。我々はかゝる意識の二元的な見方に加擔することができない。何となれば質料と形式、特殊と一般、所與的契機と統制的契機等は原始的な現象から唯論理的に抽象せられるものであつて、現象そのものうちにはかゝる二元的對立を認めることはできないからである。意識の統一は要素 a, b, c, \dots の單なる總和ではなく、むしろこれらの要素が相互に置かれる關係形式の微分 da, db, dc, \dots の積分にも比すべきものである。微分中には既に全體の構成原理が潜勢的に包含せられる。かの或るものであるが故に同時に又他のものでなければならぬと云ふカントの問題は、絶對的存在の視點からは矛盾以外の何ものでもないとも見えるけれども、今上述の如き見地に立つときはそれは極めて自然的であり又むしろ必然的であるとさへ考へられる。何故ならば、最初に與へられるものは抽象的な「一」と抽象的な「他」との絶對的な對立ではなく、「一」は「多」のうちに「多」は「一」のうちに、最初

から相互規定の關係に於て、又相互代表の關係に於て、與へられるものだからである。

四 記號の觀念的意味——模寫說の克服

以上我々は代表機能に關してその認識批判的な演釋、換言すればその基礎付けを志し、かゝる機能は結局意識構成の本質的前提であること、その形式的統一の必要條件であることを明かにした。我々の任務は併しながらかゝる一般論理的なものに止らず、むしろ代表機能が個々の異なる文化領域に於て如何なる展開をなすかを明かにせんとするところにある。自然的な象徴體系に於けると同様に、言語、藝術、神話等の人爲的な象徴體系に於ても、個々の記號の成立にはその根底に意味付けの機能を必要とする。従つてこれらの體系に於ては個々形象は常に或る精神内容の表現であり、而もそれは個々形象が存在して然る後

に精神内容が附加せられると云ふやうな關係ではなく、むしろそれとは逆に、個々形象の存在それ自身が精神的な意味付けの機能によつて始めてそこに設定されると云ふ風になつてゐるのである。若し記號が感覺的存在の單なる模寫であるならば到底その多様性を完全に再現することができないに違ひない。記號の特徴はむしろ感性的なものを捨て去つて唯精神的内容のプレグナントな契機を固定するところにあると云はなければならぬ。かくて個物は意識の背景に押し込められるけれども、その代りに全體がその前面に躍動することができる。個物のうちに、従つて又記號のうちに、全體は既に潜勢的に包含されてゐる。かゝる潜勢的な全體は個物によつて、従つて又記號によつて、始めて現動的となり具體的となる。この意味に於て記號は凡百の結合を一撃にして共鳴せしめる精神的手段であると云ふことができるであらう。

如上の關係は科學的な記號の體系に於て最も明かにこれを看取することができる。

さる。或る物質を表はす化學式はその物質が與へる感性的印象からは全く自由であるにも拘はらず、その物質が行ふ凡ゆる反應、その物質に關する凡ゆる法則を代表する。こゝに記號が意識の材料ではなく、その形式、その全體的运动を表現する好適例が見出される。併しながらかゝる關係は科學的記號の體系に於て認められるばかりではない。言語はその感性的基柢に於ては單なる音知覺に過ぎないけれども、それは思想の力學的な動きを代表する。而も力學的な動きを代表するに止まらず、既にライブニツツによつて指摘せられた如く、かゝる運動そのものを活潑ならしめる。運動は記號によつてその據點を與へられ新しい道に導かれる。科學は記號によつて新しき法則を發見し、言語はこれによつてその思想を複雑にするのである。

かく記號はその一面に於ては必ず感性的であるけれども、それが表現するところは常に精神的な普遍妥當性であると云ふことができる。従つてこゝでは感

覺主義的な *Nihil est in intellectu, quod non ante fuerit in sensu* (知性のうちには嘗て感性中になかつた何ものもない) も、觀念論的なその逆も、共に問題たるの意義を失ふものと云はなければならぬ。何となればこゝでは感性が知性に先行するのでも、又知性が感性に先行するのでもなく、知性は感性のうちにそれ自らを啓示し、感性は又知性の基礎の上に始めてその存在を保證せられるのだからである。従つて我々は心像の世界を一步も踏み越えることができないやうに見えながら、而もかゝる心像の世界を通して精神的な生活を營むことができる。それは心像の世界は決して與へられたる世界の單なる模寫ではなく精神がその内的必然的な法則に従つて創造するところの世界であるからに他ならぬ。我々が現實と名けるところのものはかゝる心像の世界以外にこれを見出すことができず、又精神がそれ自身の姿を見出すのも亦實にかゝる心像の世界に他ならぬにも拘はらず、而も我々はそのうちに於て客觀的眞理を把捉する

ことができる。何となれば客觀的眞理なるものは結局精神それ自身の活動の形式に過ぎないからである。精神的活動以外に絶對的實在を求め物自體を求めるのは、思考の幻影であり誤れる問題設定であると云ふことを、こゝに我々は深く自覺しなければならぬ。

然るに古來哲學が記號に對して示した信任の度と云ふものは必ずしも重厚でなかつた。それは特に生命の認識に於て著しい。生命は記號の間接性によつてその具體性を毀損せられるが故に、これは唯直覺によつてのみ認識せられると考へられたのである。神秘主義の哲學が特にこの點を強調したことは改めて説くまでもないが、既にプラトンはその第七書簡に於て觀念と記號との關係を論じ、後者の前者に對する不妥當性を指摘してゐる。「普遍的記號學」の提唱者たるライプニッツによれば人間は唯象徴によつてのみ認識することができ、象徴による認識は盲目なる認識であつてこゝに人間の有限性がその弱點を暴露

する。神的理性は象徴を必要とせず而も完全なる認識に到達することができるものと考へられた。カントも亦その判断力批判の一節に於て *intellectus arche-typus* (原始的知性) と *intellectus ectypus* (派生的知性) とを對立せしめ、前者は直覺的で心像を必要としないもの、後者は推論的で心像を必要とするものとなした。かゝる對立の見地に於ては象徴が複雑になればなる程本質的内容はその背後に掩蔽せられると考へられる。一面から云ふとこれは又生命と文化との對立にも適用される。文化的構成の過程が進行すればする程我々は生命的な直接性から引離されるとも考へられるであらう。従つて文化哲學の任務はかゝる掩蔽物を除去して再度原始的な實在を直覺するところにあるやうにも思はれる。然るに一方に於ては哲學はもはやかの神祕主義的直接性の天國に留ることを許されない。その機關はどこまでも概念の精密性に於て、又論證の明瞭性に於て働くことを要求される。このデイレムマを切抜けるためには我々には在來

の考察方向を逆轉せしめるより他に道はないのである。凡ゆる文化的構成の背後に不變的實在を求める代りに、構成作用そのものうちに立つてそこに支配する根本原理を追求しなければならない。哲學の課題は所與的存在の忠實な模寫と云ふ構想から絶縁して世界構成の作用に向けられる。そこに我々は、所産は雜多でも生産の作用には一様性があり、形態は區々でも形成の作用には自らなる典型的大綱が存することを見出すことができる。記號の生成は實にかゝる營みそのものであり、そこに行はれる原理法則の自己啓示である。哲學は記號の價値を疑ふより前に、記號によつてのみその任務を遂行し得ると云ふことを覺らなければならないのである。

第一章 哲學史上に現はれた言語の問題

第一節 觀念論の歴史に現はれた言語の問題

(Platon, Descartes, Leibniz)

哲學史上言語の起源及びその本質に關する問題は古く存在の問題と同時に現はれてゐる。哲學的反省の初期に於ては言語と存在、語とその意義とは不可分の全體を構成すると考へられた。そこでは言語は外界の事物と同様に個人の肆意を超越するところの客觀性を有する。語は存在の象徴ではなくその現實的な構成部分である。哲學的な言語觀に先行せる神話的言語觀に於てはこの語と事物との區別に對する無關心は一層顯著なものがある。そこでは語は事物の本質

であり、語を自由に驅使するものはその語によつて呼ばれる事物そのものを驅使することができる。事物の世界とそれを表はす名の世界とは同一實在でありそこには同一作用聯關が想定される。凡ゆる呪文の根底にはかゝる信念が横つてゐるのである。神話的世界觀が個々の神々から統一的な全能神を作り出すに至つて、言語も亦個々の呪文から全世界を支配する神の言葉の思想にまで發展して行つた。

ギリシヤ哲學に現はれるロゴスの概念には尙ほ明かにかゝる神話的言語觀が反映してゐる。ヘラクレイトスのロゴスは嘗て何ものによつても造り出されぬもの、過去現在未來に亘つて嚴存するもの、而して萬物の支配者であると考へられた。併しながら彼れに於てはその調子は未だ全く神話的であるにも拘はらず、その思想の根底には既に明かに哲學的思索の萌芽を認めることができる。ロゴスは萬物の支配者であるばかりではなく、それは宇宙の不易なる法則であ

る。彼れにあつては呪的神話的な力の聯關が問題ではなく、凡ゆる現象の背後に存する意義聯關が問題となつてゐる。全體的な生成流轉のうち個物は他物との對立によつてその意義を明かにする。語は對象の一側面を固定するに過ぎないから、對象を正しく理解するためにはこれを他語との對立に於て把捉しなければならぬとせられた。

ヘラクレイトス以後この語と存在との異同は彼れに於けるが如き統一の見地から眺められず、各々別々の問題として取扱はれるやうになつた。ソフィストに於ては語と存在との不一致が強調せられる。ソクラテスの歸納法はその同一性の解明に對する努力である。然るにプラトンに至つて再度語と存在との關係が統一的な哲學的視點から問題とせられるに至つた。プラトンの若年の師クラテュロス (Kratylus) はソフィストに反對して語と思想的內容との一致を主張したと云はれるが、プラトンにとつては兩者の間に直接的相合を認める考へ方

は餘りにも素朴的に見えた。彼れがその第七書簡に於て述べるところの認識の四つの段階の思想は實にこの間の消息を明かにするものである。認識の眞對象に至る道は先づ *ἄνομα λόγος εἶδος* (名、定義、心像) の三階梯を経なければならぬ。圓について例示するならば先づ圓と云ふ名を必要とし、次に圓は中心から等しき距離にある點の軌跡であると云ふやうな言語的定義を必要とし、更らに實際に描かれた圓の感性的心像を必要とする。併しながらこれらはそれ自身としては何れも圓と云ふ眞對象を認識せしめるに足りない。即ち觀念の理性的洞察たる *εἰσαγωγή* (眞知) たるを得ないのである。眞知はこれらの三階梯を超越し而もこれらを綜合するものでなければならぬ。かく語も心像も共に觀念を直接指示することはできないけれども、而も兩者と觀念との間には間接的な關係を認めることができる。即ち兩者は共に觀念に向つての努力を包含する。この意味に於て心像も言語も共に觀念の代表であり、意味の感性的記號による

表現である。プラトンはこの関係を *metesis* (參與) と云ふ。例へば「同じ」と云ふ觀念は同じ石同じ木等によつて代表せられるが、觀念そのものは石や木を包含しない。然るに石や木がなければ觀念そのものも我々の認識に現はれないのである。ここに我々はプラトンの方法論の核心に觸れることができる。彼れが「フェドン」に於て説くやうに從來の行き方とは逆に哲學的思索の道は *ἐπιγυατα* (實際) から *λόγος* (理論) に行くものではなく *λόγος* から *ἐπιγυατα* に向ふのである。プラトンに於て始めて代表の概念が眞に中心的な體系的意義を獲得したと云ふことができるであらう。プラトン以後彼れが峻別したロゴスの二義、即ち概念自身としてのロゴスとその言語的代表としてのロゴスとの區別は漸次その限界を曖昧にした。アリストテレスの範疇論に於ては論理的形式と言語的形式との無意識的な同一視が認められる。而してスコラ哲學はかゝる潮流のうちに終始したのである。然るに近代の初頭に於てロレンツォ ヴァラ

(Lorenzo Valla), ロドヴィコ ヴィヴェス (Lodovico Vives) 等は單なる文法的論理學に反對し、全人格の發露たる修辭學のうちに眞の思考作用の法則を求むべきことを主張し、ペトルス ラムス (Petrus Ramus) はその典型として數學的認識に則るべきことを強調した。デカルトはその主著のうちには言語に關する哲學的思索を掲げなかつたが、メルセンヌ (Mersenne) に當てた書簡のうちには於て *mathesis universalis* (普遍學) に對して *lingua universalis* (普遍的言語) の並立すべきことを説いた。數學の體系は少數の記號によつて表現せられるが、他の凡ゆる認識も亦、その形相は複雑でもその根本形式は繰返されるものと考へられるから、少數の言語的記號によつてこれを表現することができる筈であると云ふのが彼れの主張である。素よりデカルトはその計畫を實行しなかつた。デルガルノ (Delgarno) は十七の根本概念に夫々アルファベットの文字を當籤め、これによつて概念の體系を表現しようとした。その後ウィルキン

ス (Wilkins) は概念の数を四十に増し、デルガルの計畫を發展させたのである。併し彼れらの基礎とするところは傳統的な概念分類であり、従つてそれらは技巧的興味に終始せるが如き觀を免れなかつた。ライプニッツに至つて始めて普遍的言語なるものが一般論理學との聯關に於て考察されるやうになる。彼れの「記號學」は事象的特性の論であつて、そこでは思想内容の論理的分析が要求される。のみならずライプニッツに於ては當時數學的知識の發達に伴つてかゝる記號的體系の構成が容易になつたことも考へられるのである。無數の數は若干の素數に包括せしめられるが如く、無數の概念は幾つかの素因に歸屬せしめうると云ふ信念が彼れの哲學の根本的基調をなしてゐる。素より普遍的記號學が可能なるためには既に知識の構成が明かであればならぬ。然るに彼れによれば逆に知識の構成は普遍的記號學によつて始めて可能となる。これは一見循環論の如くにも見えるが、併しながら兩者の相關を認めるところに彼れの

哲學の特徴が存するのである。語は感性的記號として認識對象の不完全なる代表に過ぎない。然るにかゝる不完全なる語の設定によつてのみ我々は對象に一歩一歩近づくことができる。人間的認識の理想は記號から感性的な覆ひを取り除くことではなくして、むしろ記號の何者なるかを深く理解しこれを完全に驅使するところに存すると云はれた。

第二節 經驗論の體系に於ける言語問題の位置

(Bacon, Hobbes, Locke, Berkeley)

合理論と異なる道は經驗論によつて踏み出された。經驗論は言語の論理的理想を求めるものではなく、言語を單なる事實としてその心理學的内容、心理學的效用を説明せんとする。ロックはその主著に於て最初言語の考察を問題外に置かうと考へてゐたが、思索の進行に伴つて概念の起源は結局命名の起源と不可

分であることを知り、後には言語を以て彼れの哲學說の實證に役立てんとするに至つた。彼れによれば語は常に感性的觀念にその成立根據を有するものである。抽象的觀念を表はす語もその起源をたづねれば結局具體的な感性的觀念を基礎としてゐる。imagine は心像を持つことであり spirit は息である。かく言語は我々の認識が外的なる感性的對象と精神の内的活動に關する直接的な意識内容から成立することを實證するものであると云ふ*。

このロックの見解は經驗論に於ける言語觀を直截に云ひ表はしたものと云ふことができる。そこでは言語は獨立的な思索對象ではなく、觀念の分析に對する方便の役目を演ずるに過ぎない。彼れらにとつては語は常に主觀的な觀念に關係するものであり、客觀的な事物の直接的表現ではないのである。ホッブスはこの點を強調して、言語は事物の質料を表はすものか形式を表はすものか、

* Locke, Essay, III, chap. 1, sect. 5.

と云ふやうな形而上學的な問題はその成立根據を失ふものであると主張してゐる*。ロックに於てもこれと同様であつて語の統一は對象の本質とは無關係であり、精神が隨意に特定の觀念群を區別し結合するところに成立する。語はかゝる精神の主觀的活動を反映するものに過ぎない**。従つて定義の問題に關してもかゝる見地に立つときは言語的定義と事象的定義との區別は考へられず、定義は常に唯名的であるとせられたのである***。

言語に關する如上の見解は一見ライプニッツの思想に近似せるもの、如くにも見えるであらう。併しながらそこには體系的な根本的對立のあることを見逃すことができない。先づ觀念と云ふことが兩者に於て全く異ると云ふことを忘

* Hobbes, Elementorum philosophiae secto prima. De corpore Pars I, Cap. 2, sect. 5.

** Locke, Essay, III, chap. 2 & 6.

*** d'Alambert : Essai sur les éléments de philosophie ou sur les principes des connoissances humaines, sect. IV.

れてはならぬ。ライプニッツの觀念はプラトンのものであり、ロック等に於けるそれは所謂感覺主義的なものである。前者にあつては客觀的論理的なものが問題であり、後者に於てはそれは主觀的心理的な意味に考へられる。ライプニッツにとつては概念の觀念的存在と事物の現實的存在との間には解くべからざる相関々係が成立する。何となれば眞理と現實、觀念と實在とはその根底に於ては同一だからである。然るに一方この相関、この豫定調和と云ふことは感覺主義の立場からは全然不可解なものとならざるを得ない。それは彼れらに對しては凡ては感覺と内省とによつて得られる直接的所與以外の何者でもないからである。こゝに於て感覺主義は認識の方便として何等媒介者を必要としない。むしろ媒介者は眞正の認識を歪曲する恐れがあると考へられる。このことはベイコン、ホッブス、ロックを経てバアクレーに至つて最も明瞭な形に於て言明された。ホッブスによれば凡ゆる眞理は事象のうち存立せずむしろ言語に於ての

み成立する。事物は具體的な個的感覺として我々に與へられるが、個的感覺は未だ事物の知識と云ふことを得ない。知識は普遍的認識でなければならず、普遍的認識の機關は言語以外にこれを見出すことができない。何となれば外界から與へられる印象は精神の自由にはならぬもので、これを科學的體系に纏め上げるためには精神自らが創り出す事物の觀念的代表者、即ち言語に依る他はないからである。従つて眞偽は事物の屬性ではなく言語の屬性であると主張された。^{*}ロックに於てもなほ普遍性の可能が許されてゐる。彼れによれば抽象的言語は普遍的概念の表現であり、普遍的概念は個々感覺と同列に心的現實性を有するものと考へられた。^{**}然るにバアクレーに至ると凡ゆる普遍性の否定が説かれるやうになる。凡ゆる現實は個々感覺以外にはないと云ふ感覺主義の主張を

* Hobbes, De corpore, Pars I, Cap. 3, sect. 7; Leviathan, Pars I; De homine, Cap. 4 et 5.

** Locke, Essay, III, chap. 3, sect. 4-6.

徹底するならばこれは當然の歸結であると云ふことができるであらう。

こゝに於て彼れはロックが言語を以てその所説の實證と見做したのに對立して言語の僞瞞性を強調する。言語は他人の研究結果を吾人に傳達する媒介者である點に於てはその價値を認めてもよいが、その普遍的な云ひまはしによつて吾人の知識を歪曲する點に於て認識の障礙となることを忘れてはならぬ。吾人は言語の覆ひを取り除くことによつてのみ眞の認識に到達することができる^{*}といつたのである。

バアクレールは併しながらこの彼れの主著に於ける主張を最後まで保持することができなかつた。彼れの最後の著作 *On the* に於てはむしろ言語の重要性が強調せられる。感覺主義が最初に見逃したロゴスの役割は思索の進行につれてそれに歸因する哲學的體系の缺陷を暴露したのである。彼れはこの著作に於て觀

* Locke, Principles, Introd., § 21-24.

念を感覺主義的心理學的意義から解放しプラトンの根本思想に合流してゐる。それと同時にそこでは言語は支配的中心的意義を與へられ、凡ゆる現實は言語に歸着せしめられるやうになつた。感覺的印象の如きも結局一つの感性的な記號的言語に過ぎない。無限なる精神はかゝる言語を通して有限なる吾人の精神にそれ自らを示現すると考へられるに至つたのである。

第三節 フランス啓蒙哲學とケムブリッジ・プラトニスト

(Condillac, Maupertuis, Diderot ; Cudworth, Shaftesbury, Harris)

經驗論の歴史に於てはこのバアクレールが最後に到達したやうな立場は孤立せる一つのエピソードに過ぎない。一般的傾向としては論理的形而上學的觀點を排斥して心理的方向へと進んで行つたのである。その結果この時代に於ては言語の個性と云ふことが問題とせられるに至つた。論理的傾向は普遍的言語の欲

求となつて現はれたが、心理的傾向はその逆の道を進んだと云へるであらう。経験論者のうちにあつてもベイコンの如きは通例の経験的言語研究と並んで哲學的文法なるものを提唱したが、それは語と對象との一般的關係を取扱ふものではなく、多くの異なる言語を比較してその特質、その功罪を明かにせんとするものであつた。^{*} 経験論の立場からは言語は客觀的事物の記號ではないから、そこには多少とも精神の自發性が働くと考へられる。従つて異なる精神は異なる言語的表現を所有すると考へられたのである。既にロックは異なる言語の間に全然その意義を同じくする語を見出すことは困難であると云ふことを指摘した。^{**} デイドゥロ (Diderot) は更らに詩文の翻譯の不可能なることを強調し、譬へ原文の思想はこれを傳へ得てもその様式は到底これを他の言語に再現することは

* Bacon, De dignitate et augmentis scientiarum, Lib. VI, Cap. 1.

** Locke, Essay, II, 22, 6; III, 5, 8.

きないと論じたのである。^{*} これらの事實はかの普遍的文法と云ふが如き構想が一個の幻影に過ぎぬことを示唆すると云へるであらう。こゝに於て人々はこの時代に於てはかゝる普遍的文法を求める代りにむしろ特殊な文體論により多くの興味を繋ぐに至つた。

十七八世紀に於ける精神史の特徴は實にかゝる様式法則の強調せられたところにある。それは人々がこの時代にはもはや單なる論理的普遍に慊らず、更らに又單なる經驗心理學の抽象的分析に満足せず、凡ゆる領域に於てむしろ特殊の普遍とも云ふべき具體的な精神の全體的な活動を理解せんと欲したからである。彼れらが追ひ求めたところのものは日本精神と云ふときの「精神」であり、大和魂と云ふときの「魂」である。それは國語の精神であり、時代の精神であり、作品の精神であつた。彼れらはこれを *genius* (精神) と名けたのである。

* Diderot, Lettre sur les sourds et muets, éd. Naigeon, 1798, II, 322 f.

デイドウロはこの言葉を用ひなかつたけれども彼れが云はんと欲したのは實にかゝる精神に他ならなかつた。英國に於てさへも人々は決して單なる感覺主義の心理學に満足してゐたのではなく、カッドワース (Cudworth) を中心とするケムブリッジ・プラトニスト (Cambridge Platonist) の如きは精神活動の形式を分割すべからざるその全體性に於て把捉せんとしたのである。シャフツベリ (Shaftesbury) によれば感性的存在の外部的構造は常に特定の内的規定即ち彼れらが interior numbers (内なる數) と名けたところのものによつて支配せられる。かゝる内的規定こそ眞の藝術家がその作品中に表現すべきものである。最高の藝術家たる自然は凡ゆる部分が整然としてその全體に歸屬するやうな作品を作り出してゐる。それと同様に眞の藝術家は精神の調和を成立せしめる數と尺度即ち精神の内的形式を洞察してこれをその作品中に表現しなければならぬ。我々は自然的有機體を観察するときそこに働く形式原理を見逃すことがで

きない。ここでは質料が形式を作るのではなく、形式こそ質料を作り出すものであり、全體こそ部分を規定するものである。然るに我々はこの同じ形式原理を我々自身のうちにも發見する。かゝる形式原理を genius と名けるならば我々に特有なる genius は結局凡ゆる事物の根底に横る genius に他ならない。かくて經驗的自我はその個性を乗り越えて宇宙の genius に合流すると云ふことができる*。

この美學的形而上學的なる内的形式の概念を言語の問題に適用せるものとして我々は、ハリス (Harris) の "Hermes or a philosophical inquiry concerning universal grammar" (1751) を擧げることができる。この著作はこれをその全體的なプランから見るときは合理主義的な傾向の著しいものであり、ポール・ルワイヤル (Port-Royal) の "Grammaire générale et raisonnée" を想起

* Shaftesbury, Soliloquy or Advice to an Author.

せしめるやうなものである。そこでは特殊言語の慣用法は無視せられ、凡ゆる言語は同一原理から理解せられんとしてゐる。而もかゝる原理は一般論理學及び一般心理學のそれであつて、例へば精神能力を表象能力と欲求能力とに分類し得ると云ふところから、文章の種類をも表象的文章と欲求的文章とに二分すると云ふやうなやり方である。然るに普遍觀念の問題を取扱ふに當つては彼れは全くケムブリッジ學派に追隨したのである。これは彼れがシャフツベリの甥として早くからこの學派の影響を受けたと云ふことによつて理解せられる。彼れによれば形式は常に質料に對して優越を保有する。而して感性的形式にはその根底に理性的形式がなければならぬ。更らに言語に於ても個々の國語にはそれに獨特な形式を附與するところの原理が見出される。かゝる原理はその國民に特有な觀念であり、かゝる觀念は乃ちその國語の *genius* となるのである。これに彼れは「言語精神」と名けた。この「言語精神」と云ふ概念を明瞭な形

で提唱したのは恐らくハリスを以て嚆矢とするであらう。かくてこの概念が廣く哲學界に行はれ一般常識となるまでに發展した。^{*}

シャフツベリ及びハリスの藝術觀言語觀が直接ハマン及びヘルデルに影響したと云ふことは種々の文獻によつて證明せられる。特にハリスがアリストテレスに於ける *ἔργον* (仕事) と *ἐνέργεια* (エネルギー) の概念を復活し、藝術も言語も共に單なる仕事と見るべきではなく、むしろそこに獨特なエネルギーを想定することによつて最も完全に了解されたとしたことは深くヘルデルの共鳴をかちえたところであると思はれる。彼れらは凡ゆる精神的存在を原本的な創造的活動に歸せしめ、凡ゆる構造を構成作用の根本形式から理解せんとした。素よりかゝる傾向は既に經驗論のうちにも亦合理論のうちにも認めらるやうに

* 特にその獨逸精神史上に於ける發展の跡はルドルフ ヒルデブランド (Rudolf Hildebrand) がグリム (Grimm) の辭典中 Geist 及び Genie の項目に於て明かにしたところを参照せられたし。

も考へられる。これらも亦言語は神が吾々に出来上つたまゝの形で與へるものではなく人間理性の所産であると主張する。併しながらこれらに於ては言語を作り出す働きは主觀的肆意的な機能と考へられるが故に、言語創造の過程は單なる發明乃至工夫であるかの如き觀を呈するのである。一方フランス啓蒙哲學はこの過程を好んで科學生成の過程に比較した。コンディヤックによれば科學は人類が言語の形成に於て開始せる觀念分析の過程の繼續に過ぎない。音記號による言語の他に人類は漸次數學的記號による言語を工夫するに至つた。併し兩者を支配する原理は共に觀念の分析、結合及び整頓と云ふ同一原理に他ならぬ。従つて科學は巧妙なる言語 (*langues bien faites*) であり言語は逆に存在に關する最初の科學である。又複雑なるものを簡單なものに、特殊を一般に包括せんとする認識的根本衝動の最初の發現であると説かれた*。モペルテュイの言

* Condillac, *La langue des calculs*.

語の起源に關する著作の如きも亦かゝる見地から言語の發達を取扱つたものである*。然るに彼れらの知的言語觀に對して新しい意味に於ける「言語理性」の概念を携げて登場したのがヘルデルに他ならぬ。それは恰も藝術理論に於てレッシング (*Lessing*) がゴツテッド (*Gottsched*) に對し又フランス古典主義に對して登場したのと同じ事情であつたと云ふことができる。言語の構造も素より全然「規則的」である。併しそれは客觀的な概念的な規則によつて導かれるものではない。又素より十分に合目的々である。併しそれはかの「無目的の目的」によつて支配せられるのであつて、單なる肆意や單なる主觀的意圖によつて引きずられるのではない。言語に於ても亦藝術作品に於ても單なる悟性的反省に於ては到底兩立しえないと考へられる諸契機が一つの全體中に統一される。従つて自由と必然、特殊と一般、主觀性と客觀性、自發性と依存性の如き

* *Réflexions philosophiques sur l'origine des langues et la signification des mots*.

對立は、それが「藝術の起源」「言語の起源」を説明するための哲學的範疇として使用せられる以前に、先づそれ自身が新しき立場から充分に規定せられ解明せられることを必要とする^{*}とせられた。そこに新しい言語觀の問題があり、それが新しい言語觀に課された課題であつたと云ふことができる。

第四節 表情としての言語——「言語の起源」の問題

(Vico, Hamann, Herder, Romantik)

經驗論も合理論も言語をその理論的内容に於て、即ちそれが認識に對する役割に於て考察した。然るに哲學思潮の進展に伴つて漸次主觀性の問題が明瞭になり精神の自發性が強調せられるに至つて言語觀も亦新しき轉廻を餘儀なくせられたのである。精神の自發性は認識の自發性に止らず、それと同時に感情の自發性であり意志の自發性である。言語も亦單なる表象の代表たるに止らず、

感情の表出であり衝動の發露である。むしろ後者こそ言語の自然的根源であると云ふことができる。既にエピクロスは言語をコンヴェンショナルなものと見ず、感覺そのものと同様に原始的なものであると考へた。而して感覺も感情もその本性上それ自らを表出する。かゝる表出は元來個人によつて異り人種によつて異なるものであるが、簡單化の目的のために又相互理解の必要上漸次一定の型に纏められると説いた^{*}。同様にルクレチウス (Lucretius) も亦言語は先天的な模擬運動として何等の熟慮を必要とせず無意識的無意志的に發生すると考へたのである^{**}。

この言語に關するエピクロス (Epikouros) の自然音説は十七世紀の終りに至つてジャンバッティスタ ヴィコ (Gianbattista Vico) によつて復活される。

* Diogenes Laertius, Lib. X, sect. 24, § 75.

** Lucretius, De rerum natura, Lib. V, 10-26 ff.

ヴィコは時代に先立つて精神科學の體系化を試み、評論から出發して言語の起源を考察した人である。彼れによれば言語はコンヴェンショナルなものではなく、それが表現するところの意義に對して自然的連關を有するものとされた。凡ての語は事物の自然的屬性を表はすものとしてか、或は感覺乃至感情の表出として成立する。従つて最も原始的な語は一綴の語根を有する擬聲語若くは感嘆詞であると考へられた。こゝから出發して彼れは凡ゆる言語の語源を説き、異なる言語に共通する「普遍的辭典」の可能を主張したのである。^{*} 彼れの所説はその細點に於ては奇怪の感を起さしめるところもあるが、而もそこには言語に關する重要問題の萌芽を藏すると云ふことができる。從來の言語觀が云はゞ音聲と意義との靜的關係を問題としてゐたのに對して彼れはその動的關係に着眼してゐる。言語は説話の力學に關係付けられ、後者は更らに感情の力學に歸着

** Vico, Principi di scienza nuova d'intorno alla commune natura delle nazioni.*

せしめられた。十八世紀は凡ゆる領域に於て感情の重要性が強調せられた時代であるから言語觀に於てもこのヴィコの所説に共鳴する者が現はれたのも偶然ではない。既にルソー (Rousseau) はその「*Essai sur l'origine des langues*」に於てヴィコの説を展開せんとした。特にヴィコの影響はハマン (Joh. Georg Hamann) に於て著しい。その象徴的な形而上學に於て、その象徴的な歴史觀に於て、更らには詩を以て人類生來の言語であるとする點に於て、兩者の間には本質的な一致を見出すことができる。ハマンは凡ゆる理性的な體系化を輕蔑し、感情の赴くところに従つてその天才を驅つたとも云ふべき人であるが、それにも拘はらず彼れの所説には不動の中心點が嚴存した。それは言語である。「言語こそ理性と啓示との母である。それはアルファでありオメガである。」彼れによれば言語に於てのみ吾々に神のロゴスが啓示せられる、而して理性とは言語に他ならぬと考へられた。従つて言語は素より單なるコンヴェンショナル

ルな記號の聚積ではなく、それは神の生命の反映でありその象徴であることが強調せられたのである*。

これらの感情的言語觀に於ては言語は理性的反省の結果として生ずるものではなく、それは原本的な感情の深みから、又無意識的な詩的創造力によつて成立すると考へられる。然るにライプニッツ流の理性的言語觀はこれに反して言語はむしろ分析的思惟の所産であり、明晰なる概念構成のオルガンであるといふ。ヘルデルがその言語の起源に關する懸賞論文に於て試みたところは實にかゝる二つの相反する言語觀に對して一つの統一的光明を指示することであつた。彼れによれば言語の起源を單なる表情に求める説からはその本質を理解することができない。言語が精神の形式として成立するためには最初からそこに

* R. Unger, Hamanns Sprachtheorie im Zusammenhange seines Denkens, München, 1905
参照。

動物に於けるとは異つた人間的な力が働いてゐる筈である。これをヘルデルは反省 (Reflexion) と名けた。我々は感覺的印象の大洋のうち、この反省によつて暫しその一つの波を區別することができ、かゝる區別によつてそこに始めて判断が可能になり概念が成立する。これが語であり又言語となるのである。

従つてヘルデルに於ては言語は感覺的印象の産物であると同時に一方には又反省の創造でもある。換言すれば反省は言語成立の内的因子として語そのものに内在するのである。コンディヤックやモペルテュイに於けるが如く心的存在として知覺が先づ與へられ然る後に概念や語が附加せられると考へられるのではない。眞に精神的な内容の成立は概念や語の成立と同時にであると云はなければならぬ。單なる印象は反省と云ふ形式的契機によつて始めて表象となり、感覺の世界は語によつて始めて直觀の世界となり得るのである。蓋し言語は意識そのもの、綜合的構成因子に他ならぬからである。ヘルデルは常に言語の發明と

云ふことを云つたけれども、彼れに於ては言語は決して單に作られるものではなく、内的な力によつて内から生り成れるものと考へられてゐたのである*。

ヘルデルのこの形式概念は併しながら合理論や啓蒙思潮に於ける「反省的形式」の概念とは餘程異つた色彩を有するものであることを注意しなければならぬ。即ち形式は質料に對して外から附加せられるものではなく、表象そのもののうちに又言語そのもの、うちに見出されるのである。従つて彼れの形式概念は既に浪漫主義哲學に於ける「有機的形式」の概念と一致すると云ふことができる。有機體の概念を明確な形に於て言語の問題に適用したのはフリドリッヒフォン シュレーゲル (Friedrich von Schlegel) を以て嚆矢とするであらう**。

今日有機體と云へば我々は單なる自然的存在を考へ易いが、浪漫主義の哲學に

* Herder, Ueber den Ursprung der Sprache 1772.

** Friedrich, von Schlegel, Ueber die Sprache und Weisheit der Indianer.

於てはそれは事實ではなく一つの哲學的原理を意味する。従つてこれを單なる詩的寓喩と見ることも亦當を得ぬものと云はなければならぬ。既にカントはその判斷力批判に於て有機體の問題を取扱ひ、これを以て自然と自由、存在と當爲と云ふ對立の調停者たらしめようとした。而してシェリングは遂にこれを凡ゆる問題解決の鍵とするに至つた。自然の無意識的な生成と精神の意識的な創造との間に存した間隙は有機體の概念によつて架橋せられる。人間は有機體としてその本性に於て既に直觀と概念、形式と對象、觀念と實在との統一を包含するものであるとせられた。反省的哲學はその出發點に於てこれらの概念の分離を想定するが故に結局その統一に到達することができない。然るに人間の創造的構想力は夙に象徴的言語を發明し、そのうちに自然をして自らその統一を語らしめるのである*。

* Schelling, Ideen zu einer Philosophie der Natur, 1797.

かゝる有機體の概念は言語の問題にも適用せられ、これによつてその意識性と無意識性、主観性と客観性、個別性と一般性との對立が媒介せられるやうになる。既にライプニッツは有機的生命の説明に當つて「個別的形式」なる概念を提唱したが、ヘルデルは更らにこれを自然から歴史に、歴史から藝術に、而してその凡ゆる種類凡ゆる様式に押し擴めた。そして求められるものは「一般性」ではあるが、併しそれはそれ自身として存在するものでも又類のうちに現はれる抽象的な統一でもなく、むしろ具體的な個別的なものうちに現はれる統一である。かくてかゝる統一、かゝる法則、かゝる具體的個別的な内的聯關こそ今や彼等によつて眞の一般と考へられるに至つた。このことはやがて言語哲學をして異なる言語の個別性偶然性の背後にかの基本的言語の一般的構造なるものを見出すと云ふ野望を一擲せしめ、異なる言語の總體それ自身のうちに眞の一般性を求めしめるに至つたのである。この總體性の概念と有機的形式の概念

が結合するところにフンボルトの哲學的世界觀が生れ、その言語觀が発生したと云ふことができる。

第五節 ウイルヘルム フォン フンボルト

(Wilhelm von Humboldt)

フンボルトは早くから言語問題をその興味の中心に置いた。彼れは言語を乗物として凡ゆる精神界を旅行することができると思つてゐたのである。彼れの敘述は難解であるけれども、それは彼れが系統的頭腦の所有者であつたと云ふことゝ矛盾しない。併しその所論を理解するためにはその藝術的な表現の背後に彼れの全體的な立場を読みとらなければならぬ。我々は以下そこから彼れが提起した三つの原理的な問題を取り上げて考察して行くことにしようと思ふ。第一に擧ぐべきは個別的精神と客觀的精神との區別、及びその綜合の問題であ

る。言語は本來かゝる二つの精神の綜合統一である。従つてそこに表現するものと表現せられるものとを分離すべきではなく、又兩者の結合は個人により或は國民によつて産出せられるものでもない。それは説明すべからざる奇蹟として國民の口の端に又嬰兒の片言のうちに忽然として成立する。かくの如きは實に人類が元來確然と區分せらるべき個性を有たず、我も汝も結局は同一起源から生成するものであると考へることによつてのみ了解することができる。若しさうでなければ我々が言語によつて相互理解に到達すると云ふことは遂に不可能に了るであらう。個體はかゝる全體からそれ自らを區分するのであるが、區分すればする程再度かゝる全體に合流せんとするのである。個體は結局全體の一片としてのみ生活するものと云ふことができる。シェリングに於ける有機體の概念も亦この意味に於ける全體的聯關であると云ふことは前に述べた。併しながらフンボルトがかゝる聯關即ち主觀と客觀、特殊と一般の統一に到る道は

シェリングに於けるが如き知的直觀ではなく、それはどこまでも經驗的な個々觀察に俟つとせられたのである。この點に於て彼れはむしろカントに近いと云ふことができる。それは認識を超越するものではなく、認識の範疇により我々の主觀によつて始めて可能となるのである。従つて言語の主觀性と云ふが如きもそこではもはや認識に對する障壁とは考へられず、むしろそれは感官的印象の客觀化に對する有效なる手段とせられるに至つた。素樸的實在論の客觀は眞の客觀ではない。客觀は主觀の内的法則によつて始めて構成せられる。それは主觀的となることによつて始めて眞の一般性を獲得する。従つて言語の觀念性はむしろその主觀性に根據を存すると云ふことができるのである。こゝに於てフンボルトは異なる言語に一般的記號を與へ數學的言語を構成する努力の無駄であることを強調した。何となればかゝる方法によつて表現しうるところは我々の思想中唯理性的構成を有する一小部分に過ぎないからである。又この主觀

性の參與と云ふことからその當然の歸結として凡ゆる語には個性の烙印が捺されると考へられなければならぬ。従つて語は不變なる概念の代表ではなくむしろ異なる世界觀の反映なのである。この意味に於てフンボルトの言語觀はライプニッツの純粹論理的な言語觀を否定するけれども、それはヘルデル及びカントの思想を媒介として再度ライプニッツの一般的原理へ復歸した。ライプニッツの單子はその個性的觀點から宇宙を反映するものであり、彼れによればかゝる個性の綜合のうちに現象の客觀性が成立する。これと同様にフンボルトにあつても個々の言語は個性的世界觀を代表し、かゝる世界觀の綜體のうちに我々によつて到達し得らるゝ限りの客觀性の概念が成立するとせられたのである。

第二の問題はかゝる客觀性の概念から出發する。客觀性は與へられるものでも模寫せられるものでもなく、精神の形成作用によつて戰ひとられなければならぬものとすれば、言語の考察は常に發生的でなければならぬと云ふのがフン

ボルトの主張するところである。こゝに發生的と云ふのは時間的な意味でも亦そこに心理的な原因が働くと云ふ意味でもなく、言語はその内在的法則に従つて漸次構成せられるものであるから、従つてその考察もかゝる構成に従はなければならぬと云ふ意味である。出來上つた言語を語とその結合法則に分割するのは單なる抽象であつて、それでは言語の本質に到達することはできない。言語の本質は語音をして思想發表の役割を演ぜしめる精神的活動そのものゝうちにある。フンボルトはこれを言語は仕事 (Ergon) ではなく活動 (Energeia) であると云つた。この意味に於て我々の任務はかゝる精神的活動の形式を明らかにするところにあると云はなければならぬ。更らに人間相互の理解を見るのにそれは決して固定せる記號によつて話者と聽者との間に完全に一致せる概念を惹起することによつて行はれるのではなく、お互に精神の琴線に觸れ合ふことによつてそこに全體的な共鳴が起ることによつて營まれる。従つて言語的意義

の負荷者は決して個々の語ではなく文章全體でなければならぬと云ふことがわかるであらう。文章全體のうちのみ言語的綜合作用の原始的な力が籠つてゐるのである。而してかゝる力かゝる作用を明かにすることによつてのみ眞に言語の理解が可能になると云はなければならぬ。

第三の問題はこの綜合の概念に關聯する。こゝに綜合とは質料と形式との綜合を意味するのである。この點に關してもフンボルトはやはりカントの思想圈にあると云ふことができる。カントによれば對象の統一は形式の統一を基礎とすると云はれる。多様の統一は感性によつて與へられるものではなく常に表象力の自發的な働きによつて營まれる。これは客觀によつて與へられるものではなく必ず主觀によつて作り出されなければならない。而もかゝる結合の形式は主觀にその基礎を有するけれども、それが必然的であり又普遍的であると云ふ意味に於て又嚴密に客觀的であると考へられた。かゝる形式を明かにするため

にカントは先づ判斷の統一に訴へ更らに間接には文章の統一に訴へなければならなかつた。判斷は與へられたる認識を統覺の客觀的統一に齎らす様式に他ならぬ。而して言語的に云へばかゝる統一は判斷の繫辭として表はされる。繫辭は彼れにあつては表象の依屬性を表現するものであつて、その心理的偶然的な共在を意味するものではないと云ふことが強調せられる。フンボルトはかくの如き形式概念を言語全體に押し及ぼしたのである。凡ゆる發達せる言語に於ては或る概念をその質料的な徵表によつて固定する作用の他にそれを思惟の範疇に振り當てる形式的な作用が見出される。例へばそれは實體概念とせられ屬性概念とせられ又活動概念とせられる。この形式的な作用こそ言語的自我意識に與へられる新しい作用であり、これによつて個々の語は言語的表現の凡ゆる可能なる場合の全體に關係付けられ、又思惟に獨特なる自發的活動と外的印象に對して唯追隨的に働く受容的活動との結合が始めて可能になると考へられた。

素よりこゝに形式と質料、受容性と自發性と云ふのはかの特殊と一般、主觀と客觀の對立の場合と同様に決して言語を構成する實在的部分ではなく、上述の如き意味に於ける發生的過程の構成契機に過ぎない。^{*}

以上我々はフンボルトの言語觀についてその輪廓特にその知的な結構を大觀して來た。併し彼れの見解の重要性は實はかゝる輪廓を充たす内容を俟つて始めて明かにせられる。彼れは言語現象の個々研究を常にかゝる理念に關係せしめ、又逆にかゝる理念を個々研究のうちに實證せんとした。哲學と科學との徹頭徹尾的携行と云ふかの先驗的方法の根本思想は、カントに於ては數學及び數學的自然科學について實行せられたが、今やフンボルトに於ては全く新しい領

^{*} Humboldt, Ueber die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues; Ueber das vergleichende Sprachstudium in Beziehung auf die verschiedenen Epochen der Sprachentwicklung, 1820; Einleitung zum Kawiwerk.

域たる言語學について實現せられたのである。^{*}

第六節 アウグスト シュライヘル (August Schleicher)

—— 自然科學的言語觀への移行

思辨的な言語觀に於て發達した言語有機體の概念が經驗的な言語研究に移植せられるに當つてそれは如何なる役割を演じたであらうか。元來この概念は自然と精神との對立を調停せんがために生れたものである。従つてそこには兩契機が云はゞ平衡状態を保つてゐる。今言語の法則が果して自然法則であるか或は歴史法則であるかと云ふやうな實際的研究に密接な關係を有する方法論的な

^{*} かくてこの言語哲學に於ける新しき立場は言語學の新しき構成を促進せずには措かなかつた。ボップ (Bopp) は既に 1833 その „Vergleichende Grammatik“ に於て全然フンボルトに従ひ比較言語學の任務をその言語有機體の概念の上に基き上げやうとするに至つた。

問題が提起せられたとき、この平衡状態は僅小の衝動によつて打破せられる。浪漫主義哲學に於ける發展の概念に對して近世科學の生物學的進化の概念が進出するやうになると同時に、この有機體の概念に於ても益々その生物學的意義が強調せられるやうになつた。十九世紀の言語研究に於ては他の精神科學の領域に於けると同様に常に有機體の概念がその中心的意義を保持してゐるが、而もその意味内容に於ては漸次浪漫的色彩を失ひ遂に全く自然科學的なものに移行して行つたのである。この過程は實にアウグスト シュライヘルの仕事にそのまゝその反映を見出し得るのである。彼れは最初その「比較言語研究」に於ては全くヘーゲル流の考へ方をしてゐた。彼れによれば言語の本質は精神生活の音聲による表現にある。表現には二種あつて一は意義の表現であり、他は關係の表現であるとせられた。意義は質料的で語根によつて表はされ、關係は形

* Sprachvergleichende Untersuchungen 1848-50.

式的で語尾變化によつて表はされる。而してこの視點から彼れは言語を分類して孤立言語、凝集言語、變化言語 (isolierende, agglutinierende, flektierende Sprache) の三種となした。孤立言語は意義のみを發音し關係はこれを語位若くは抑揚によつて表現するもの、凝集言語は意義音と關係音との區別を有するけれども兩者を唯外面的に結合するに過ぎないもの、而して變化言語に至つて始めて兩者の有機的結合が現はれると考へた。而して第一は兩者の未分化的統一の状態に、第二はその分化的状態に、第三はその止揚的狀態に相應するものとして、これらをヘーゲル流の辨證法的構成に當嵌めたのである。併しながらシュライヘルはこの同じ著作に於てかゝる辨證法的分類と並んで既に言語の自然科學的な分類をも試みてゐる。彼れは植物學若くは動物學に於て特定の徵表から類屬を區分するやうに、言語に於ても亦特定の「音聲法則」による分類が行はれなければならぬと主張した。素よりこの時代の彼れにとつては未だ純經

驗的な分類は不可能であつて、その實際行つたところのものは全く思辨的な域を脱してゐない。孤立言語を結晶に譬へ、凝集言語を植物、變化言語を動物に譬へたと云ふが如きはこの間の消息を語るものと云へる。併しながら彼れが自然科學的分類の必要を説く根底には彼れの自然言語觀の反映を見るのである。言語を自然物と見ることによつてそこには當然自然法則が行はれなければならぬ、又その方法も亦全然自然科學的でなければならぬと云ふのが彼れの信念であつた。歴史は精神の自由を反映するものであるが言語は無意識的な必然性の産物である。歴史時代に於ては精神はもはや音聲を創造せずむしろその分解が現はれる。言語の人間精神に對する關係は自然の世界精神に對する關係に比すべきものとされる。文献學 (Philologie) は言語を通して民族の精神生活を理解せんとするものであるから歴史に關係があるけれども、言語學 (Linguistik) は人間的意志によつて如何ともし難い自然物をその對象とするものであるから

その方法も亦精神科學の方法とは全然異り全く自然科學のそれに一致すべきであると主張せられたのである。

これより二十五年の後シュライヘルは全く自然科學的な精神の下にその「*ダウイン説と言語學*」^{*}を發表した。この著はヘッケル (Haeckel) に與へる公開狀の形に於て書かれたものであり、そこでは自然と精神との對立を否定し全然ヘッケル流の一元論の立場が宣言せられてゐる。精神と自然、内容と形式、本質と現象を區別する二元論的視點は既に克服せられたる舊思想であつて、今や我々は物質のない精神はなく精神のない物質はないと云ふことを明かに認識しなければならぬ。むしろ日常使用せられるやうな意味での精神とか物質とか云ふ概念は否定せられなければならない。兩者は一である。かゝる立脚地からの當然の歸結として言語學はそれ自らに特有なる法則と云ふが如きものを主張

* Die Darwinsche Theorie und die Sprachwissenschaft.

する権利を喪失しなければならぬ。デアウインが動植物の種について述べたところはそのまま言語有機體にも當筋る。言語の領域に於ても生物學に於けると同様に適者生存の理によつて特定の種が残される。そこに彼れは自然科学及び精神科學に共通せる統一的原理を認めることができるかと主張した。

かゝる信念はシュライヘルの最初の出發點であつたヘーゲル流の形而上學とは對蹠的な位置に立つと云へる。併しながら彼れはかくヘーゲルからヘッケルに轉向して行つたが、それはやはり一つの形而上學から他の一つの形而上學への轉向に過ぎない。眞に有效なる實證主義の立場は彼れによつては未だ將來せられず後の學者に俟たなければならなかつた。そこでは一元論的進化論的な大づかみな説明のかはりに、言語學に特有な方法と法則とが明瞭な形に於て意識せられることを必要とするのである。

第七節 現代言語學の成立——「音聲法則」の問題

實證主義は併しながら單なる事實の叙述に終始することはできない。實證主義が凡ゆる形而上學を否定するならばこの否定のうちに於て既に自ら一つの形而上學を主張してゐると云ふことを忘れてゐると云はなければならぬ。事實の叙述は結局法則の定立をその目的とするものであるが、かゝる法則的なものが凡ゆる科學に於て同一意義を有すると考へるのは單なる便宜上の假定に過ぎない。素よりそれが法則である以上そこにはその論理的構成の上に於て何等かの共通點を有してゐるに違ひない。併しながらそれより大切なことは異種科學例へば自然科学、歴史科學、言語學等に於ける法則概念の特殊性である。この兩方の視點から法則概念の發達は決定せられるのである。今我々が一般的な科學の歴史に於てかゝる法則概念の變遷を眺めるとき、そこに我々は内容的には

全然直接關係がないと思はれるやうな異種科學の間に於て、その法則概念の變遷には掩ふべからざる類似性のあることを發見する。自然法則の概念の發達と言語法則の概念の發達とは全くその軌を一にしてゐるのである。これは單なる外面的な影響によるものではなく、全く各時代の根本的思潮にその根源を求めなければならぬ。

十九世紀中葉に於ける精密科學の原理論はヘルムホルツ (Helmholtz) の「力の保存に就て」^{*}なる論文に於てその代表的な表現を獲得した。彼れは自然界の作用は凡て牽引力と反撥力とによつて營まれ、その強度は作用點相互間の距離に規定されると云ふ命題を提出した。而もこの命題は單なる事實の敘述ではなく、その妥當性と必然性が自然認識の形式から導き出されると主張された。即ちかゝる立場に於ては自然現象は凡て不變的な法則によつて支配されると考

^{*} Ueber die Erhaltung der Kraft, 1847.

へられたのである。少くとも科學の理想はかゝる機械的世界觀の獲得にある。科學はその出發點に於てかゝる法則性の妥當せぬ領域が存在するか否かを決定する必要を感じない。又よし事實によつて自然認識の限界が指示せられる場合が起るとしても、かゝる限界以外の領域は本來人間精神及び人間の科學に對しては超越的なものであり、従つてやはり科學はこれを問題とする必要を感じないのである。デュボアレーモン (Du Bois-Reynolds) がその「自然認識の限界に就て」^{*}に於て述べたところもその主旨に於ては全く同一であると云ふことができる。

かゝる見地をかゝる浪漫主義的な言語有機體の概念と比較するときは、そこに大きな變化が起つたことを見逃すことができない。ポップは言語に對して海や川の限界以上に判然たる法則を要求することはできぬと説いた。ゲーテが用ひ

^{*} Ueber die Grenzen des Naturkenntnis, 1872.

た有機體の概念もこれと大差のないものである。ゲーテによれば言語は永久に確固たる規則に従ふものではあるが、併しかゝる規則は生命あるものとせられたのである。然るにヘルムホルツやデュボアレーモンと時を同じくして現はれた「若き文法學者」達に於ては言語を支配する法則も亦例外を許さぬものとせられるに至つた。レスキン (Leskien) は1876年露獨語の語形變化に關する論文の中に於て、言語の法則が例外を許すものであると云ふのは言語そのものが既に科學的認識の對象たることを得ないと云ふのと同然であると云ふ意味のことを書いてゐる。オストホフ (Osthoff) とブルグマン (Brugmann) はその「形態學的研究」*に於て凡ゆる語音變化は例外なき法則によつて理解せられると説いたのである。

然るにこの時代は決して永續することができなかつた。精密科學の領域に於

* Osthoff und Brugmann, Morphologische Untersuchungen I, 1878.

ては實證主義の勃興に伴ひ既に1876年キルヒホフ (Kirchhoff) が彼れの有名な力學の定義に於て法則の普遍性と必然性を否定するに至つた*。彼れによれば力學は自然に於ける運動過程の完全なる又一義的なる叙述以外の何者でもないと考へられた。即ちこゝでは現象の根據が問題ではなく唯その規則的な形式が求められたのである。言語學の領域に於ても亦これより稍々晩れて同様の變遷が行はれる。ヘルマンパウル (Hermann Paul) はその「言語史の諸原理」**に於て音聲法則は普遍的條件の下に必ず起るところのものを云ひ表はすものではなく、唯或る歴史的現象の一群に現はれる規則性を確立するに止まると主張した。こゝでは凡ゆる言語構成に對する最後の因子が問題ではなく、法則の概念は唯言語史上に於ける特定の事實を表現するに過ぎない。これに關聯して單

* Vorlesungen über mathematische Physik, Bd. I, Mechanik.

** Prinzipien der Sprachgeschichte, zuerst 1886.

なる生理的要素過程の必然的結合を除いては再度自由なる心理的過程に對する關心が復活した。素よりこゝに精神的因子と名けるところのものはかのフンボルトや浪漫主義の哲學に見られるものとは著しくその趣を異にしてゐる。一度機械論の洗禮を受けた後に於ては精神も亦自然的色彩に彩られることを免れない。即ちそれは心理學的法則換言すれば所謂聯合法則に支配される。従つてそこに精神的因子が問題とされるやうになつても、それは他の生理的因子と同列に於て言語構成の仕事に參與すると考へられたのである。^{*}

こゝに於ても言語は尙ほ自然現象と見做される。唯從來と異なる點は力學的自然的概念の代りに精神物理的な自然の概念が導入せられたところにある。この間の消息はウントの敘述に於て最も明かにこれを讀みとることができる。彼れ

^{*} 例へば Osthoff, Das physiologische und psychologische Moment in der sprachlichen Formbildung, 1879 を見よ。

によれば音聲法則（こゝでは生理的法則）と類推形成の法則（心理的法則）とが常に相互規定の關係にあると云ふことは、兩者を最初から對立する二つの力と見ず、人間の統一的な精神物理的體制のうちはその共同の基礎を有すると見做すとき初めて容易にこれを理解することができる、音聲法則の形式はそれが規則正しく再生せられると云ふ點から見ればそこには必ず類推形成に働くと同様な聯合過程が參加する筈であるし、他方聯合過程は又凡ゆる心理過程がさうであるやうに練習によつて自働的なものとなるのであるから、兩者は決して別々のものではなく最初から密接な關係に立つものと考へなければならぬと主張せられた。このウントの主張には言語を全人間の表出と見做すかの觀念論的な綜體性への要求が新しい形に於て述べられてゐると考へることができらうであらう。併しながらこの要求はウントに於ては未だ充分なる展開を見なかつたのである。

フンボルトから「若き文法學者」へ、又シュライヘルからヴントへの推移に於て、そこに我々は方法的觀點に立つときは、言語問題が一つの圓周を廻轉したと云ふことに氣付くであらう。言語學が自然科学であるためには例外なき法則に従はなければならぬと云ふ考へは、後に自然そのもの、概念が漸次單に見かけ上の統一を有するに過ぎないと云ふことが明かにせられるに至つて、當然廢棄せられなければならぬ運命を荷つてゐたのである。従つてそこには音聲法則を以て單なる流行の法則に過ぎぬ、と云ふやうな主張さへ發生するに至つた。言語は個人の肆意によつて産出せられ、習慣と模倣とによつて傳播すると云ふのがデルブリュックやフリードリッヒ ミュラーの考へ方であつた*。こゝに於て言語哲學にはかゝる對立を如何に處理すべきかと云ふことが新しい課題として與へられる。我々は今かゝる對立かゝる不統一を熟視するとき、そこに

* Delbrück, Das Wesen der Lautgesetze, Ostwalds Annalen der Naturphilosophie I, 1902; Fr. Müller, Sind die Lautgesetze Naturgesetze? Techners Zeitschrift I, 1884.

かの實證主義的觀察企圖の破産と云ふことに想到するのである。この點を明かにしたのはカール フォスラアの功績であると云ふことができる。フォスラアはその二著「言語學に於ける實證主義と理想主義」及び「創造及び進化としての言語」*に於てヘーゲル哲學に立脚する。併しそれよりも著しいことは彼れがフンボルトの流を汲むものであると云ふことである。フンボルトによれば言語は單なる仕事ではなく活動であると云はれた。又言語に於て事實 (Tatsache) として與へられるものは、それを作り出す精神的な行實 (Tathandlung) にまて遡ることによつて始めて完全に理解することができると云はれたのである。このフンボルトの根本思想はフォスラアに於て、素より歴史的な變形は受けてはゐるが、殆んどそのまま踏襲せられてゐる。既にフンボルトにあつてもかゝ

* Karl Vossler, Positivismus und Idealismus in der Sprachwissenschaft, 1904. Sprache als Schöpfung und Entwicklung, 1905.

る原理は言語の心理學的起源を意味するものではなく、むしろ言語構成の凡ゆる階梯を通じて働くところの精神的形式を意味するものであつた。言語構成は與へられたる自然的萌芽の單なる發育と考ふべきものではなく、新しい階梯に於ては精神の自發性が再度そこに新しい形に於て働くのである。この意味に於てフォスラアは進化と云ふ多義的な概念の代りに、言語に對しては創造と云ふ概念を用ふべきであることを強調した。言語の或る状態に於て發見せられる合法性は單なる化石に過ぎない。然るにこの既に生成せるもの、背後には常に生成そのものを驅るところの精神的活動が嚴存する。かくて我々はかゝる精神的な生産作用のうちのみ言語全體の本質を求むべく、又言語に現はれる個々現象の説明を求むべきである。實證主義の物の見方は要素から全體に、即ち音聲から語に、語から文章に、而してそこから言語の特殊の意義を理解せんとするが、今やかゝる物の見方は逆轉せしめられなければならぬ。意義の優越から、

意義作用の普遍性から、言語發達の個々現象が理解せられる。人間の會話に生命を與へる精神が文章を作り、句を作り、語を作り、音聲を作るのである。かゝる觀念論的な因果觀を徹底せしめるならば、音聲論、語形變化論、章句法等の下位學問は最上位の學問たる様式論 (Stilistik) に於て始めて眞の解明を贏るものと云はなければならぬ。章句法が取扱ふ文法的規則は慣用によつて化石せる規則である。これに反して様式論は言語の活きた創造を取扱ふものであると云ふことができる。こゝに於て凡て精神的なものに於ては、既に生成せるもの、形式を理解せんがためには生成そのもの、形式から出發しなければならぬと云ふ命題が妥當すると考へられたのである。

かくフォスラアは實證主義に反對するけれども、言語史的な事實の認識に關して、その研究態度として實證的であることに反對するものではない。即ち方法論的な實證主義はこれを肯定するのである。彼れが否認するところのものは

事實を與へることによつて精神的解釋の能事畢れりとするかの實證主義的形而上學に他ならぬ。而してかゝる形而上學に代るものとしてフォースラアが立脚するところはかの觀念論的な形而上學である。而して彼れはその中心的地位を美學に與へんと欲した。「言語即ち精神的表現と云ふ觀念論的定義が正しいならば、言語發達の歴史は精神的表現形式の歴史に他ならぬ。換言すればそれは最廣義に於ける藝術史である」と。かく彼れがクローチエ (Croce) に従つて言語を美學の一部門に包括せんとするとき、そこに一つの危険が横つてゐることを忘れてはならない。かの合理主義的な文法論に於ては言語は普遍的論理學に包括せられたが、今やこれと同様のことが美學に對して行はれんとしてゐる。美學は果してクローチエやフォースラアが云ふやうに表現に關する科學の全體であらうか。否むしろそれはかゝる科學の一部分に過ぎない。藝術形式と言語形式との關係はこれらと他の形式、例へばそれ自らに特有な形象的世界を媒介と

して獨特な意味世界を構成するかの神話形式との關係と同列にある。藝術形式は一つの象徴形式に過ぎないと云はなければならぬ。こゝに我々の出發點たる系統論的な根本問題が存するのである。言語は恰も凡ゆる精神的存在から放射せられる光線が通過するところの焦點にも比すべきものであらう。異なる源泉から來る多くの光線は一度は先づこの點に於て合流し、而して更らに再度異なる精神的領域へと別れて行く。この點から見ても言語哲學を美學の一部門と見る考へ方は首肯することをえない。若し美學がかゝる役割を引き受けようと思ふならば、その前に美學は先づ藝術的表現に對する凡ゆる特殊的關係を解消して、こゝに云ふ「象徴形式の哲學」の如きものとならなければならぬのである。

第二章 感性的表現の相に於ける言語

第一節 表出運動としての言語——身振語と音聲語

或る精神形式の特徴を決定するに際して特に必要なことはその形式に特有な尺度に従ふことである。外來の視點特に形而上學的範疇の導入と云ふが如きは極力これを避けなければならぬ。世界の存在を與へられたものと考へる獨斷論的觀點からは精神的自發性の内的特徴は遂にこれを把握することができない。存在を内的なものとの外的なもの、心的なものとの物的なものとの二分し、世界を表象の世界と對象の世界との峻別する物の見方は更らにその各々に對して同様の區分を強要する。例へば意識的存在を更らに獨立せる多くの能力に區分する

が如きがこれである。認識に對する批判が進むに従つてかゝる區分は決して存在そのものに内在する絶對的規定ではなく、むしろ認識の媒介によつて始めて成立するものであると云ふことが明かにせられるに至つた。特に主觀と客觀、自我と世界との對立の如きは單なる所與ではなく、我々はむしろかゝる對立を基礎付けなければならぬ立場にある。認識世界の構造に於てのみならず、更らに他の精神的根本機能が作り出す諸々の世界、例へば言語藝術神話等の構造に關しても全然これと同様のことが云へるのである。

言語はその發生の當初に於てはかゝる内外の區別に對して全く無關心であつた。そればかりでなく、この無關心と云ふことがその成立にとつて本質的に必要であつたとさへ云ふことができる。そこでは精神的内容とその感性的表出とは一であり、兩者は相俟つて言語を構成する。内容が先づあつてそれに表出が與へられるのではなく、内容は表出のうちに又表出と共にその存在を與へられ

その意義を獲得する。言語は兩者の原本的綜合として始めから全體として成立するのである。例へば擬態的表出に於ては表出は内的過程の本質的構成因子であつて、これがなければ擬態現象そのものが成立しない。この意味に於て現代心理學が言語を一般的な表出運動のうちに數へることは正當であり、又かく考へることによつて心理學は當然かの靜的な感覺主義を捨て動的な意識を問題とせざるを得ないと云ふことがわかるであらう。運動及び運動感情が意識構成の根本的因子であるならば、靜的なものから動的なものを導き出さうとした感覺主義には根本的な誤謬があつた。靜的な状態の固定化は唯抽象の産物であつてかゝる抽象の産物から逆に原本的な動的現象を理解することはできない筈だからである。擬態的運動は内なるものと外なるもの、精神的なものと肉體的なものとの直接的統一であり、従つて感情とその表出、内的緊張とその解除とは時間的に分離することのできぬ單一作用中に成立すると考へなければならぬ。

身振語に關する心理學説はこれを指示身振と摸倣身振とに大別する。而して指示身振についてはその起源を把握運動に歸着せしめてゐる。ヴントによればかゝる發展の過程はなほ幼兒に於てこれと平行的なものを認めることができるかと説かれた。幼兒の把握運動が手の届かぬところにある物に向けられるときはそれは既に一種の指示的な意義を包含する。これが反復せられる結果そこに獨立な指示身振が成立すると云ふのである。然るにこの一見簡單に見える把握運動から獨立な指示身振への移行が必ずしも簡單な過程でないことは、如何なる高等動物にもこの種の指示身振が發達してゐないと云ふ事實がこれを證明する。人間に於ては正にこの移行、この飛躍によつて始めて感性的欲求的な自我が、その感性的欲求的な内容を自我に對立するものとして、即ち對象として定立する第一歩を踏み出すのである。認識機能の發展は實にこの直接的具體的把握から、直接的具體的には手の届かぬところにある對象の間接的抽象的な把

捉に至る過程に他ならぬ。獨逸語で云へばそれは (greifen から Begreifen に、
Weisen から Beweisen に移行する過程であると云ふことができる。拉典語の
Dicere も亦希臘語の *Deiknunai* に含まれると同一語根から轉化したのである。
身振語の意義を模倣運動の方面から理解せんとするときその結論は一見異なる
方向に導かれるやうにも見えるであらう。それは模倣は模倣せらるべきものに
對して忠實であればある程完全であるとも考へられるからである。事實自然民
族の身振語は著しくこの意味に於ける忠實性を保有すると報告せられた*。併し
ながら模倣も指示も單にそれだけで言語的機能を營むものではなくそこには他
の因子の共働を必要とする。アリストテレスは語を模倣であり又人聲は模倣に
最適の機關であるとなしたが、それと同時にかゝる擬態的機能と並んで言語構

* 例へば Mallery, Sign language among North American Indians, Reports of the Bureau of
Ethnology in Washington I, 334.

成には象徴的機能の参加を必要とすると説いた。従つてアリストテレスに於け
る模倣の概念は著しく廣義なものであつて、彼れは藝術活動の起源をも亦模倣
に求めたのである。藝術は云ふまでもなくその最も原始的な形に於てさへ單な
る外物の模寫ではなく常に内的な計畫を必要とする。少くともそれは外物に關
する特徴の把握でなければならぬ。この意味に於て模倣はそれ自身のうちに既
に主觀の構成を含み表現の契機を懷胎するのである。これと同様に身振語が一
種の模倣であるとしてもそこには必ずや單なる模寫以上の或るものが要求せら
れなければならぬ。而してこの或るものは音聲言語に至つて益々明かにその姿
を現はすと云ふことができる。

音聲言語はその初め例へば自然民族の言語に於ては身振語と密接に結合して
ゐる。音聲的な概念は「手による概念」(manual concept) によつて始めて完
全に理解せられるとさへ報告された*。兒童の言語に於ても亦その初期に於て同

* Cushing, Manual concepts, The American Anthropologist V.

様の時期が見出されるのである。^{*} 併しながら言語は一方に於て音聲の参加によつて全く新しい構成原理を獲得する。音聲はその構造上流動的であり分節的である。従つてそれは固定的な表象内容を代表するよりはむしろ流動的な表象過程を表現するに適してゐる。客觀的に云へば對象の存在よりはむしろその形式的な關係を表現し、主觀的方面から云へば單なる表象内容の靜的狀態よりはむしろ感情乃至思考の力學を表現するのである。身振はそのうちに空間的契機を含むが故にこれによつて力動的なものを現はさうとすれば唯それ自身區分的なもの、連續による他はない。のみならず心的過程は一度急激なる身振によつて放出されて了へば、それは一先づ終局的な靜止狀態に導かれる。従つて身振は力動そのもの、表現的媒質としては不充分であると云はなければならぬ。然るに音聲はそれ自身力動的連續的推移的であるためによく心的過程の代表たる役

^{*} Clara und William Stern, Die Kindersprache², 144.

割を果たすことができる。かくて言語は音聲の参加によつて新しい方向に向つて急激なる進歩を示した。言語は音聲それ自身の構成法則によつて自らを構成し、ひいては思考過程そのものに對しても指導的役割を演ずるに至つた。素より言語と思考との關係は相互的であつて、音聲が思考過程に影響すると同時に逆に音聲も亦思考の法則に順應しなければならぬことは云ふまでもない。併し言語が身振的言語の一次的放出、瞬間的満足と云ふ直接性を超えて、構造的體系的な間接性を獲得し、眞に心理過程の代表者たりうるに至つたのは、實に音聲の力動性及び特にその豊富なる分節的構造に俟つところが大であると云はなければならぬ。

第二節 擬態的、類推的及び象徴的表現

言語の理論は藝術の理論や認識の理論と同様に模寫說から出發する。古代人

の興味は認識が物の世界を忠實に映し出すことができるか否かを問題としたと同様に、言語が認識を忠實に再現しうるか否かにかゝつてゐたと云へる。ストアはこれを肯定しソフィストはこれを否認したのである。併し彼れらの論争は結局彼れらの問題設定に根本的誤謬が内在することを曝露したに過ぎない。エピクロスは言語は対象の性質を表現するものではなく話者の心意を反映すると説いたが、それならば尙ほ更ら言語には各人各様なる個別的内容を反映する力はないと云はなければならぬであらう。事實はむしろ逆で、言語は現實に對するその類似性を失へば失ふほど、即ちそれから離れれば離れるほどこれを代表し象徴する機能を發揮することができるのである。ケーラー (Köhler) の觀察によればチムパンジーの如き高等動物に於てはそれが發音しうる音聲的要素の數は必ずしも人間のそれに劣るものではないと云はれる。然るにそれらは常に直接的感情に結合し現實の感覺に規定せられるが故に、遂に人間的言語に於け

るが如き言語的意味の負荷者たる役割を演ずることができないのである。

かく言語が現實から離脱する過程はこれを三段階に區分することができる。

我々は今これを擬態的、類推的及び象徴的段階と名けよう。これらの段階は單に言語の領域に於て認められるばかりでなく、我々は更らに藝術に於て又認識に於てもこれを再認する。従つてこれは單なる抽象的圖式たるに止らずそこにはそれ以上に尙ほ機能的法則的意味を想定することができる。言語の初發段階を究めれば究めるほど我々はそこに擬態的表現の相を看取する。これは身振言語に於て然るのみならず、幼兒の音聲言語の發達に於て、更らには又原始民族の音聲言語の構造に於て同様に見出すのである。ここでは言語は音聲と事象との感覺的個別的類似性の基礎の上に成立する。ウェスタアマン (Westermann)^{*}によればエーヴェ (Ewe) 語の「歩く」と云ふ動詞は異なる歩き方の直觀

^{*} Grammatik der Ewe-Sprache, 1907, 83, 130.

的印象に相應する少くとも三十三種の形を區別することができ、而もそれらの大部分は歩く主體の大小によつて縮小形を作ることが出来るからその數は更らに倍加されると云はれる。言語の擬態的乃至擬聲的構造はかく原始的言語に於て認められるのみならず、それは現代の發達せる言語に於ても至るところこれを明瞭に指摘することができる。而もそれは單に過去の原始的構成の殘渣としてばかりではなく現代に於てなほ新しく生ける力として働いてゐるのである。これらの事實を根據として十六七世紀の言語哲學は人類最初の言語即ち彼れらの所謂アダムの言語なるものはこの擬聲の原理によつて構成されたと考へた。この *lingua adamica* なる概念はその後言語學の發達によつて抹殺されて了つたが、擬聲原理の問題は永く學者の注意を牽引したのである。ライプニッツ^{*}はこれによつて個々概念の内容のみならず或る種の文法的關係形式さへ表現せら

* *Nouveaux Essais* III, 3.

れると云ひ、フンボルトも亦そのカーヴィ (*Kawi*) 語の研究に於て *ka* は固定的なもの、*i* は流動的なもの、*mi* は動搖的なものを表現すると説いた。ヤコブグリム (*Jacob Grimm*) の „*Deutsche Grammatik*“ に於ては *k* が疑問を *t* が解答を表現すると云はれ、*mi* ヲラア (*Fr. Müller*) の „*Grundriss der Sprachwissenschaft*“ によれば *a, o, u* が遠き場處を、*e, i* が近き場處を意味し、*m* が「我」を、*ti* が「汝」を表現する場合が數多く擧げられてゐる。同様の例は枚擧に違がな^{*}。

併しこれらの場合の見方によれば既に單なる擬態的段階を超えて類推的段階に入つたものとも云へる。そこでは個々音聲による個々内容の模倣に止らず、音聲系列の構成的差異が純粹關係の表現に適用されてゐると考へられるからで

* *Wundt, Sprache I, 345; Täuber, Die Ursprache und ihre Entwicklung, Globus, Bd. 97, 1910* 等参照。

ある。こゝでは音聲形式と事象の関係形式との間に類推が成立する。この類推的關係を最も直截的に示す例として音樂的アクセントを擧げることができる。フンボルト^{*}によればシャム語の如き印度支那系言語に於ては音樂的アクセントによつて語義乃至文法的關係が區別せられると云はれる。又ウエスタアマン^{**}によればスーダン (Sudan) 語の如きは上昇型下降型等の三段的構造を有し、高音は遠きもの速きものを低音は近きもの遅きものを表現し、一方に於ては又これらは語源的差異や肯定否定等の如き文法的差異を表現すると説かれた。又デイルマン (Dillmann)^{***}によればエチオピア語に於ても同様の原理に従つて名詞と動詞とが區別せられると報告せられてゐる。その他類推的な關係は所謂母音調和の現象に於てもこれを認めることができる。例へばウラルアルタイ語に於

* Einleitung zum Kawi-werk, Werke VII 1, 300.

** Die Sudan-Sprachen, 76; Die Gola-Sprache in Liberia, 19.

*** Grammatik der äthiopischen Sprache, 115.

ては母音は硬母音と軟母音とに分たれ、而して或る語幹に接尾語を附加する場合には必ず語幹に存すると同種の母音を相應せしめなければならぬと云ふ規則によつて兩部分の結合を緊密にし全體の意味の統一を企圖するのである^{*}。

更らに「疊語」の現象に於てはこの關係はより明瞭なる形を以て現はれる。

素より疊語はその最も簡單なる形に於ては感覺的印象の反復を直接描寫する場合もある。併しながらその發達せる形に於てはこの同じ形式によつて更らに複雑微妙なる意味的差異を表現するに至るのである。先づ疊語は或る種の言語に於ては複數の表現として用ひられる。而もこの場合複數の主格が全體として行ふ行爲に關係せず、その各メンバーに分配的に關係する行爲を現はすときに用

* Boethlingk, Die Sprache der Jakuten, S. XXVI, 103; Winkler, Das Uralaltaische und seine Gruppen, 77; Grunzel, Entw. ein. vergl. Gramm. d. altaischen Sprachen, 20, 28; vgl. auch Boas, Handbook of American Indian Languages I, 569; Meinhof, Lehrbuch der Nama-Sprache, 114.

ひられると云ふ*。更らに疊語は力、大さ、長さ等を表現する。従つて形容詞に於ては比較級を、動詞に於ては強勢形乃至使役形を構成する**。然るに或る場合には逆にこれを非現実的な表現に用ひ、又形容詞の縮小形若くは動詞の限定形を構成する場合に用ひると云ふ例などが擧げられる***。こゝに於ては疊語はもはや全然その内容的類推を離れ全然形式的手段として機能するのである。それはタガル (Tagal) 語に於けるが如く或るときは現在や未來の構成に、又或るときは過去の構成にも用ひられ、又ジャヴァ語に於けるが如く名詞から動詞を構成

* Gatschet, Grammar of the Kamath language, Contrib. to North American Ethnology, Vol. II, 259; Brockelmann, Grundriss der vergl. Gramm. der semitischen Sprachen II, 457.

** Brandstetter, Die Reduplikation in den indischen, indonesischen und indogermanischen Sprache, 1917 参照。

*** Codrington, Melanesian Languages, 147; Boas, Handbook I, 444, 526.

する手段としても使用せられる*。かく言語的表現の手段は始め模倣的若くは類推的段階に於て成立しても、後には漸次その最初の出発點たる直觀的條件を離れて、遂に純象徴として全く異なる精神的内容の負荷者たる役割を演ずるやうになるものであると云ふことができるのである。

* Humboldt, Kawi-Werk, II, 86, 125.

第三章 直觀的表現の相に於ける言語

第一節 空間及び空間的關係の表現

純粹感覺なるものが單なる抽象の産物に過ぎず、具體的感覚は常にその最初の設定に於て既に時空の形式を必要とする如く、言語も亦時空的直觀の媒介によつて始めて一つの語を形成することが出来る。アメリカ土語に於ては「立つ」と云ふ動詞は如何なる場處に立つか、如何なる恰好で立つか、又話者に對して如何なる位置に立つか等に従つて夫々異なる語形を與へられる。^{*}馬來語系例へばジャヴァ語に於ても亦同様の原理に従つて少くとも十の立ち方、二十の坐り方

^{*} Boas, Handbook I, 445; Gatschet, Klamath language, 396, 433, 460.

が區別せられると云ふ。^{*}言語はこの意味に於て空間的直觀に規定せられるのみならず、それは又空間的性質と音聲的性質との直觀的類推の基礎の上に構成される。多くの言語に於て母音^o、^oが遠方を、^e、ⁱが近き場處を表はし、^{**}同様に子音^p、^t又は^b、^p、^k、^s等が遠方を、^m、ⁿ等が近き場處を表はすと云ふことは前にも述べた通りである。^{**}又指示詞がこれによつて遠近を區別するのも普通の場合であるが、或る場合には同様の原理に従つて話者にも聽者にも見えぬものと云ふ第三の種類を表現することもある。[†]尙ほ「我」「汝」「彼」を表はす代名

^{*} Crawford, History of the indian archipelago II, 9; Codrington, Melanes. language, 164.

^{**} Humboldt, Kawi-Werk II, 153; Meinhof, Lehrbuch der Nama-Sprache, 61; Steinthal,

Mande-Negersprachen, 82; Gatschet, Klamath language, 583.

^{†††} Brugmann, Die Demonstrativpronomina der indogermanischen Sprachen; auch Grundriss II, 2, 302; Brockelmann, Grundriss I, 316; Dillmann, Aethiop. Grammatik, 94; Winkler, Das Uralaltaische und seine Gruppen, 26.

詞の構成も同じ原理に従ふと云ふことができる。更らに印歐語の定冠詞が「彼」の指示詞から漸次轉化して名詞の客體性を表現するに至つたものであることは周知の事實である。併し冠詞は必ずしもその最初から對象の客體性を表現するものとして現はれたとは云ひ難い。エーヴェ (Ewe) 語の冠詞は名詞だけでなく代名詞にも副詞にも亦關係詞にもその語尾として附加せられると云ふ。而もそれは現代歐洲語に於けるが如き一般的意義をもたず、始めは單語の個性と密接に結合してゐた。インドネシア語に於ては冠詞は事物に對するものと人間に對するものとの二種に區別される^{*}。又ポンカ (Ponca) 語に於ては生物と死物と

+ Boas, Handbook I, 41, 445, 945; Gatschet, Klamath language, 538; Meinhof, Bantugrammatik, 39; Humboldt, Werke VI, 1, 312.

* Westermann, Grammat. der Ewe-Sprache, 61.

** Codrington, Melanesian languages, 108; Brandstetter, Der Artikel des Indonesischen verglichen mit dem des Indogermanischen, 1913.

に對して異なる冠詞が用ひられ、前者は坐つてゐるか立つてゐるか動いてゐるかによつて更らに三分せられ、後者は長さもの丸きもの及び集合的なものに對して各別々の形を有するのである^{*}。ソマリ語の冠詞は ni , ni , o の語尾によつて表はされ ni は話者に近き人若くは物、 o は中位のもの、 ni は見えざるものに對して與へられる^{**}。この最後の場合の如きは冠詞がその發生に於て空間的關係と密接に結合することを最も直截的に示す例と云ふことができるであらう。

かく言語の構成に對して空間的表象の役割は著しきものがあるが、空間的表現プロパアが空間的直觀に規定せられることは言を用ひない。併しこゝにも一つの原理が嚴存するやうに見える。即ち空間的表現は自己の身體の空間的直觀を出發點として、そこから漸次遠心的に一般的な空間的概念に發展するのであ

* Boas, Handbook I, 939.

** v. Tiling, Die Vokale des bestimmten Artikels im Somali, 132.

る。自然民族の言語に於ては抽象的な前置詞後置詞の代りに具體的な身體部分の名詞が空間的表現として使用される。マンデ (Mande) 語に於ては前に、後に、上に、中に等歐洲語に所謂前置詞の代りに夫々眼、脊、頂、腹等の名詞が用ひられ、他のアフリカ土語若くは南洋土語等に於ても同様に顔、脊中、頭、口、腰、股等の名詞が使用せられる。この空間詞が身體部分の名詞にその起源を有することは更らに發達せる段階にある言語についても、語源的にはこれを證明することが出来る。素より空間詞の發生は身體部分に對する關係のみに訴

* Steinthal, Mande-Negersprachen, 245.

** Westermann, Sudansprache, 53; Gola-Sprache, 36; Reinisch, Die Nuba-Sprache, 123; H. C. v. d. Gabelentz, Die melanes. Sprachen, 158, 230; Ray, The Melanesian Possessives, 352.

*** Ernann, Aegyptische Grammatik³, 231, 238; Steindorf, Koptische Grammatik², 173; Brockelmann, Grundriss I, 494.

へるものではなく、後を跡と云ひ下を地と云ひ上を空と云ふやうな類も尠くない。併しそこに働く原理となるものは身體部分の場合と大差がないと云ふことができるであらう。

印歐語に於ける名詞の格が空間的表象にその起源を有すると云ふ所謂格の位置説なるものについては異論がある。併しこれを多くの異種言語の格構成と比較するとき原理的にはその正當性を承認せざるを得ない。アメリカ土語及び特にウラルアルタイ語に於ては現代歐洲語に於けるが如き主格目的格所有格等の區別の代りに場處的規定を表はす複雑なる格が發達してゐる。内にある場合、側にある場合、内に置く場合、側に置く場合、下に置く場合、引離す場合、位置を變化せしめる場合 (inessive, adessive, illative, allative, sublative, delative,

* Westermann, Ewe-Grammatik, 52; Boetlingk, Die Sprache der Jakuten, 391; Hoffmann, Japanische Sprachlehre, 188, 197; Winkler, Der uraltaische Sprache, 147.

translative) 等が異なる格變化として區別される。^{*} 更らに空間的關係は或る種の言語に於ては名詞の格變化としてではなく異なる空間動詞によつて表現される。例へばアメリカ土語に於てはこれによつて動作が家のうちに於てか家の外に於てか、水の上に於てか陸上に於てか、水上から陸地に向つてか陸地から水上に向つてか等更らに多くの區別が行はれると云ふ^{**}

空間的表現が更らに人稱代名詞の發生と密接な關係にあることは前にも述べた。フンボルトによれば後者は前者から派生すると説かれたのである。現代の言語研究はむしろこの關係を轉倒せしめんとしてゐる。併し何れの説が正しいにしても、兩者の間に密接なる關係が存すると云ふ事實には變りはない。フン

* Winkler, Das Uraltaische und seine Gruppen, 10, 171; Grunzel, Vergl. Grammatik der altaischen Sprachen, 49; Boas, Handbook I, 1017; Gatschet, Klamath language, 479, 489.

** Boas, Handbook I, 112, 244, 300; P. W. Schmidt, Die Mon-Khmer-Völker, 57.

ボルトは夙に馬來語日本語アルメニヤ語等に於てこの關係が存することを指摘した。印歐語に於ても語源的には同様の關係が見出されるのである。^{*} 更らにこれはセム語、アルタイ語、アメリカ土語、オーストラリア土語等凡ゆる言語に通ずる事實であると云ふことができる。^{**} チェロケーゼ (Tscherokeese) 語に於ては立つてゐるか、坐つてゐるか、寝てゐるか、歩いてゐるか、こちらに向つて來るか等に従つて九つの第三人稱が區別される。^{***} クワキウトゥル (Kwakiutl) 語に於ては見えるところにあるか、見えぬところにあるかに従つて異なる代名詞^{****}

* Brugmann, Demonstrativpronomen, 30, 71, 129; Grundriss² II, 2, 381.

** Brockelmann, Grundriss I, 296; Dillmann, Aethiop. Grammat., 98; Grunzel, Vergl. Grammat. der altaischen Sprachen, 55; Gatschet, Klamath language, 536; Matthews, Languages of the Bungandity Tribe in South Australia, 61.

*** Humboldt, Werke VI, 1, 23; Fr. Müller, Grundriss II, 1, 224.

**** Boas, Handbook I, 527.

が用ひられる。代名詞はかく空間的差異によつて區別されるのみならず、それは又時間的差異若くは他の性質的差異によつても區別される場合が報告されてゐる。^{*}これらは凡て人稱代名詞がなほ具體的直觀的基柢に於て使用せられることを示すものであり、それらが發達せる言語に於けるが如き抽象的思惟的分類の段階に到達せざることを示すものと云ふことができる。日本語に於ては「我」は中心を表はす場處的副詞により、「彼」は「そこ」「かしこ」を表はす場處的副詞によつて表現される。^{**}そのやうに言語は話者を中心として聽者若くは第三者を周邊とする空間的圖式を作り、更らにこれを人稱的關係に適用すると云ふ二重の機能によつてその空間表象を構成するのである。

* Boas, Handbook I, 117, 574, 617.

** Hoffmann, Japanische Sprachlehre, 85.

第二節 時間表象

言語的思惟に對して時間表象の構成は空間表象のそれよりも著しく困難な仕事であつたに違ひない。幼兒の言語發達に於ても時間副詞は空間副詞に比しておくれて發見される。時間副詞が現はれても「けふ」は「いま」と同義に用ひられ、「きのふ」は明日にも、又「あした」は昨日にも應用される。^{*}空間的な「ここ」「そこ」「かしこ」は同時的同一直觀中に與へられるが、時間的早晚を認識するためにはより永い意識の統一を必要とする。素より「いま」は幾何學的な意味に於ける時點ではなく、所謂「心的現在」と云はれる或る一定の長さを保持するけれども、この永さを超えた時限は既に現在の意識中には存在しない。この現在と非現在との差異的感情を表現するために、多くの言語は空間の場合と

* Stern, Kindersprache, 231.

同様に特定の母音若くは子音を適用してゐる。かゝる適用が既に成立せる空間語の應用であるか、或は獨立的起源を有するものであるかは確證することのできぬ問題であらうが、^{*}兎に角そこに同一音聲が使用せられる場合が頻繁に認められると云ふことは言語學上の事實であることに間違ひはない。或る種のアメリカ土語に於ては「こゝ」と「いま」、「かしこ」と過去若くは未來を表はす副詞には同一音が用ひられる。^{**}又ソマリ語では前にも述べた空間的差異を表はすと同じ冠詞の母音變化によつて時間的差異をも表現する。例へば「現存する人」の冠詞は^{***}の語尾を、「昔の戦争」の冠詞は^oの語尾を與へられる。

これらの例にも現はれる過去と未來との無差別性と云ふことは時間詞につい

^{*} 日本語に於ては本來的な時間詞を見出すことができぬ。「まへ」「あと」「はい」「おせい」と云ふのは何れも空間的表現の應用に過ぎない。(譯者)

^{**} Gatschet, Klamath language, 582.

^{***} v. Tiling, a. a. O. 145.

て特に注目すべき現象だと云へる。エーヴェ語に於ては「きのふ」と「あした」とは同じ副詞によつて表現される。^{*}アメリカ土語に於ても同様の現象が認められる。^{**}シャムバラ (Schambala) 語に於ては遠い昔と遠い未來とは同一語で表はされると云ふ。^{***}これは拉典語の *olim* 獨逸語の *einst* に於ても同様である。レール (Roehl) はシャムバラ語に於ける過去と未來との無差別を、土人が時に關する概念を有たずそれを物の直觀の如く直觀するところから理解せんとしたが、この時を物的に見る物の見方は前述したソマリ語に於けるが如き「名詞の時」と云ふ形に反映する。名詞に「時」を與へるのはソマリ語のみならずアメリカ土語及びその他メラネシア語等に於ても認められる。^{****}この態度は又行爲を

^{*} Westermann, Ewe-Grammatik, 129.

^{**} v. d. Steinen, Die Bakairi-Sprache, 355; Boas, Handbook I, 176.

^{***} Roehl, Versuch einer system. Grammat. der Schambalaspache, 108.

^{****} Boas, Handbook I, 39, 110; Codrington, Melanesian languages, 164.

も物的に見てこれを獨立的個別的な部分に分割する結果を將來してゐる。例へばアフリカ土語の或るものに於ては「彼れは溺れた」と云ふ代りに「彼れは水を呑んだ、死んだ」と云ふやうに同一過程を二つの別々な動詞によつて表現するのである*。かく過程を獨立的部分の集合と見るのは心理學的に云へば意識の範圍が比較的狭小であつて、未だ時間的構造を全體的に見透す能力が發達してゐないためであると考へられる。こゝでは過程は多くの現在點のモザイクに過ぎず、ツェノンの飛矢不動の逆説がそのまゝ妥當する底の構造を有するのである。眞に時間が全體として認識せられるためにはそれは機能的力動的に眺められなければならない。

原始的言語が時間表象について猶ほ甚だ未發達の段階にあると考へられるに

* Westermann, Ewe-Grammatik, 95 ; Sudansprachen, 48 ; Reinisch, Die Nuba-Sprache, 52 ;
Steinthal, Die Mande-Negersprache, 222.

も拘はらず、その或るものは頗る複雑な時間形式を所有すると云ふことは一見不可解な現象と考へられるであらう。エンデマン (Endemann) によればソト (Sotho) 語に於ては、三十八の肯定時法、二十二の可能法、四十の條件法、四つの願望法及びその他多數の分詞形が區別せられると報告されてゐる。レールによればシャムバラ語に於ては能動的直接法だけでも約一千の動詞形が區別されると云はれてゐる*。併しこれら無数の動詞形が純時間的關係を表現するものでないことは云ふまでもない。それらはむしろ質的差異、様相的差異を示すものである。動作について云ふならばそれが急に起るか漸次に起るか、一時的であるか連続的であるか、完結的であるか反復的であるか等、動作の時間的形態質の表現に過ぎない。かゝる動作形式の直觀的表現は質的であり具體的であ

* Roehl, Schambalagrammatik, 111 ; Meinhof, Vgl. Grammatik der Bantusprachen, 68, 75 ;
Seler, Das Konjunktionssystem der Maya-Sprachen, 30 ; v. d. Steinen, Die Bakairi-Sprache, 371.

り絶對的であつて、抽象的時間形式の量的關係的相對的表現からは當然これを區別して考へなければならぬものなのである。

時間的表現の發展はこの實體的時間直觀から關係的時間概念への道を辿るのである。この意味に於てセム語の如きはなほその中道にあると云ふことができる。そこでは未だ過去現在未來の三分法が現はれず、完了的及び未完了的行動の二分法が採用される。従つて動詞の完了形は過去の表現にも現在の表現にも用ひられ、未完了形は過去現在未來を通じてその應用範圍を有するのである。^{*}印歐語に於てもその初期に於ては動作形式の表現が眞の意味に於ける「時」の表現に先行したと云ふことは多くの學者によつて指摘せられた。シュトライトベルク (Streiber) は原始印歐語には眞の意味に於ける「時」はなく、動詞は凡て時に對して無記であり、過去は特殊の副詞により未來は意志的表現によつ

* Brockelmann, Grundriss II, 144.

て代用せられたと説いた。^{*}ブルグマン (Brugmann) によればホーマア時代のギリシヤ語に於ては凡ゆる動詞は前述の如き動作形式と密接なる結合に置かれてゐると云はれる。^{**}クルティウス (Curtius) は就中ギリシヤ語の語幹 $\lambda\alpha\beta$, $\tau\epsilon\iota\delta$, $\rho\epsilon\upsilon\gamma\eta$ 等は瞬間的動作に對して用ひられ、その母音を變化せる $\lambda\alpha\mu\beta$, $\tau\epsilon\iota\delta$, $\rho\epsilon\upsilon\gamma\eta$ 等は持続的動作に對して用ひられることを指摘した。^{***}これらの直觀的時期を通して印歐語が現代の純粹關係的時間の表現法を獲得するに至るまでには永い發達の時期を必要としたのである。^{****}

* Perfektive und imperfektive Aktionsart, Paul-Braune-Beiträge XV, 117.

** Griechische Grammatik³, 469.

*** Zur Chronologie der indogerm. Sprachforschung, Abh. Sächs. Ges. Phil.-hist. Kl. V, 229.

**** Curtius, Die Bildung der Tempora und Modi im Griechischen und Lateinischen, Sprachvergl. Beiträge I, 150; H. Paul, Die Umschreibung des Perfekts im Deutschen mit haben und sein, Abh. d. kgl. Bayer. Akad. d. Wiss., I. Cl., XXII, 161; Leskien, Grammatik der Albulgarischen Sprache, 215.

一般に時間的關係の表現はその最初の段階に於ては「今」と「今ならざるもの」とに二分せられ、次の段階に於て「完了」と「未完了」との區別、従つて又種々の動作形式の區別が抽出せられ、最後に純粹關係形式としての過去現在未來が區別されると考へられる。併しこの最後の段階と雖も言語的表現は常に科學的時間體系に於ける量的秩序からは明かにこれを區別しなければならぬ。後者の成立にはそこに明瞭なる數概念に關する記號體系の應用を必要とするのである。

第三節 數概念の言語的發達

數學に於ける數概念は直觀世界からは獨立した純粹な思惟的構造と考へられる。然るに言語的な數概念は常に直觀世界と密接な結合に置かれてゐる。このことは數詞の發達に於て明かにこれを看取することができる。原始民族に對し

て物を數へると云ふことは個物を彼らの身體部分に相應せしめることに他ならぬ。従つて數が言語的概念となる以前それは計數的な身振と不可分の關係にある。最も普通に行はれる身振は左手の五指を右手にて指示し、指示せられたる指を順次折り曲げる身振であらう。^{*}シュタイネン(v. d. Steinen)によればバカイリ(Bakairi)土人は玉蜀黍の豆を數へるに際して右手でこれに觸れることなしに左手の指に當籤めるだけでは三個以上を數へることができなかつたと報告されてゐる。彼れらにとつては右手の觸感を絶対に必要とするのである。この計數動作の身體感を必要とすることは多くの原始言語に於ける數詞の構成に反映してゐる。ソート語に於ては五は指を「全部曲げろ」と云ふ意味の言葉で現はされ、六は他の手の指に「跳べ」と云ふ意味の言葉で現はされる。又こ

^{*} Westermann, Ewe-Grammatik, 80; Reinisch, Nuba-Sprache, 36; v. d. Steinen, Unter den Naturvölkern Zentral-Brasiliens, 84.

^{**} Meinhof, Bantugrammatik, 58; Ray, Torres-Expedition, 373; Boas, Handbook I, 1047.

の場合使用せられる身體部分は必ずしも両手の指及び兩足の趾に限定せられるわけではない。英領ニューギニアに於ては左手の五指からその手首に移り更らに肱、肩、頸、左胸、腹、右胸、右頸等と數へるもの、或は同様に鼻、眼、耳等を使用するもの等が見出されると云ふ*。如何なる身體部分を計數の基本に置くかに従つて五進法十進法二十進法等が發達することについてはポットの著書がその豊富なる例證によつてこれを明かにしてゐる**。併し上述の例からも原理的にはこの三方法に限るものでないことがわかるであらう。

これらの方法、これらの體系が發達する以前には人類は素より言語的抽象的に計算をすることはできないが、數百頭の家畜のうちからその一頭が不足することを見出しうると云ふが如き直觀的な數形態の把握に對する能力はこれを保

* Ray, op. cit. 364; Lévy-Bruhl, Das Denken der Naturvölker, dtsh. Ausg., 159.

** Pott, Die quinare und die vigesimale Zählmethode bei Völkern aller Weltteile, Halle, 1874.

有すると考へなければならぬ*。かゝる直觀的具體的な數形態知覺の根柢の上に個物を上述の如き一定の計數的順序に對應せしめる機能が加つてそこに始めて眞の意味に於ける計數作用が可能になるのである。この數構造が直觀的具體的な數形態知覺によつて規定せられると云ふことは、多くの言語に於て計數せらるべき對象の性質的差異に應じて異なる數詞が使用せられると云ふ事實に反映する。而もそれらは計數せらるべき物の名、物の性質を表はす名であることを通例とするのである。例へばフィデー語に於ては二つの椰子の實、十の椰子の實、百の椰子の實を表はす言葉、或は十の丸木舟、十の魚等を表はす語が各々異なる獨立語なのである。其他生物と死物、人、動物、植物、家、平らなもの、長いもの、丸いもの等を數へる數詞が夫々別々であると云ふやうな例は枚舉に

* Wertheimer, Das Denken der Naturvölker, Zeitschrift für Psychologie, Bd. 60, 321; auch Lévy-Bruhl, a. a. O.

違がない。クラマス (Klamath) 語の如きに於ては數へられるもの、並べ方に
よつても同一事物が異なる數詞によつて稱へられるとさへ云はれるのである。^{*}こ
れらの例に於ては數は純量的な規定ではなく、むしろ質的或は類的な規定に固
く結合してゐる。而してこの傾向は既に一般的な數の表現を獲得せる後の段階
にある言語に於ても永く殘留する。マレイ・ポリネシア語に於ては 5 horses
と云ふかほりに「馬五尾」と云ひ、4 stones と云ふ代りに「石四つの丸いも
の」と云ふ。日本語及び支那語に於ても同様の語法は著しく複雑な形を示して
ゐるのである。^{**}

* H. C. v. d. Gabelentz, Die melanesischen Sprachen, 23; Codrington, Melanesian languages,
241; Ray, Torres-Expedition III, 475; S. Powell, Introduction to the study of Indian
languages, 25; Boas, Handbook I, 396; Gatschet, Klamath language, 532; auch
Wertheimer; Lévy-Bruhl.

** Fr. Müller, Novara-Reise, 275, 303; Codrington, 148; v. d. Gabelentz, 23, 255; Hoff-
mann, Japanische Sprachlehre, 149.

かく言語的數概念が直觀的全體印象に規定されるものであることは單數及び
複數の構成にも認められる。多くの言語は眞の意味に於ける單數複數の文法的
形式をもつてゐない。それらの言語では名詞は單數でも複數でもない中間的意
義を與へられる。フリードリヒ ミュラアはマレイ・ポリネシア語について
「人」と云ふ名詞は具體的な人でもなく又抽象的な人でもない、併し何れかと云
へば歐洲語の複數に近い含蓄を有する、従つて單數を表はさうとすればそれは
特定の「一」を意味する語によつて限定せられなければならないと説いた。^{*}特に複
數を表はさうとすれば素よりやはり特定の語を必要とするのである。アルタイ
語系に於ても同様のことが報告せられてゐる。^{**}これら現在に於て名詞の數を有

* a. a. O. 274; Grundriss II, 2, 114.

** Boethlingk, Sprache der Jakuten, 340; Winkler, Der uralaltaische Sprachstamm, 137;
Grunzel, Vergl. Grammatik der altaischen Sprachen, 47.

せざる言語に於てのみならず、既に形式的數形を發展せしめたる言語に於ても、かゝる區別以前そこには未分化の段階が存したことは疑ひを容れないところである。印歐語系に於て明かに複數的意義を有する語が動詞の單數形と結合しうるのはそれが集合的全體と認められるからに他ならぬ。ギリシヤ語の中性複數が動詞の單數と結合するのはこの中性語尾 η が語源的には複數語尾ではなく女性單數語尾の η であつたことによつて説明される。即ち η なる形式は元來複數でも單數でもなく集合的な意味に用ひられ、必要に應じて複數とも單數とも解釋しうる底のものであつたことが視はれるのである。^{*} 同様の現象は埃及語系に於ても認められると云ふ。^{**}

更らに「數」を單數と複數とに二分するのもこれは發達せる言語に於ける現

* Brugmann, Kurze vgl. Grammatik, 413; Griechische Grammatik³, 369; Meyer-Lübke Grammatik der roman. Sprachen II, 69; III, 26.

** Ernann, Aegyptische Grammatik, 108; Brockelmann, Grundriss I, 437; II, 77.

象であつて、その初期に於てはもつと現實に即した種々の段階が區別せられるのを通例とするのである。「二數」或は「三數」なるものが存在したことは周知の事實であるが、アビボン (Abipon) 語に於ては複數が更らに稍々多數なるものと甚だ多數なるものとの二分せられたと云はれる。フンボルトによればアラビア語に於てもこれと全く同様に「二數」以外更らに三乃至九を表はす複數と十乃至それ以上若くは不定數を表はす複數とが存在することが指摘せられた。^{*} 併しこれらの場合に於ては數概念は未だ全く數學的論理學の意味をもたず、唯直觀的な集合の表現として用ひられる。従つてそれらは量の表現と云ふよりもむしろ前にも述べたやうに數形態知覺に對する性質的表現に過ぎないと考へられるのである。

複數構成の直觀的基柢となるものとして多くの對象の空間的同在と云ふこと

* Ueber den Dualis, Werke, VI, 1, 19; vgl. auch Brockelmann, Grundriss I, 436.

以外に行爲若くは現象の時間的反復と云ふ事實が考へられる。かゝる時間的數形態知覺の表現は屢々疊語法によつて行はれる。クラマス語に於ては對象が單一であるか多數であるかに關する複數形は發達してゐないにも拘はらず、動作が單一時限に於て完結するか又は異なる時限に分配せられるかに従つて單數形又は複數形が區別せられ、而してかゝる複數形の表現、例へば異なる動作を異なる時限に亘つて行ふ場合、或は同一動作を異なる動作者が繰返す場合の表現には疊語法が用ひられるのである。而もこの意味に於ける疊語法は凡ゆる品詞に對して適用される。^{*}クワキウトゥル (Kwakituli) 語に於ては名詞の疊語法は歐洲語に於けるが如き複數の表現に對して用ひられるのではなく、一つの對象があちらこちらに起ること、若くは色々の種類から成立することを示すものであると云^{**}

* Gatschet, Klamath language, 419, 611.

** Boas, Handbook I, 144.

はれる。かゝる分配的複數に對して疊語法を使用するのは啻にアメリカ土語ばかりではなく、その他ハム系言語の如きもその例のうちに數へられる。^{*}かくこゝでは動詞の複數形を規定するものは對象の數ではなく、むしろ動作の分配性 (distribution) によるのであるから、例へばフーパー (Hupa) 語の如きに於ては、多くの個人が參加する行動でも例へばダンスの如く行動そのものが全體的であれば單數を使用し、これに反して主格は一人でも行動そのものが分配的であればその場合の動詞は複數形に作るのである。^{**}これと同じ理由から動詞の複數が目的格の複數に支配される場合が認められる。これはアメリカ土語に於ては極く普通のことであるが、その他の異系統の言語に於ても頻繁にこれを見出すことができる。^{***}フンボルトによればタガール (Tagal) 語の "mag-sulat" (mag

* Meinhof, Die Sprache der Hamiten, 25, 171.

** Boas, Handbook I, 104.

*** Ray, Torres-Expedition III, 311; Reinisch, Nuba-Sprache, 56, 69.

|| 複數前綴、*simat* || 書く) は多くの人が書く場合にも、多くを書く場合にも、又書くことを職業とすると云ふやうな場合にも等しくこの同じ表現が使用せられると報告せられた。^{*}

以上我々は複數の成立根據としてその空間的並びに時間的規定について考察して來たが、そこには更らに第三の或る意味に於ては更らに重要な規定が存在することを忘れてはならぬ。前二者が客觀的であるに對してこれはむしろ主觀的起源を有するものである。人類の意識に對して「我」と「汝」との對立ほど重要なものはないと云へるであらう。この事實は多くの言語に於てそこになほ名詞の「數」が發達せぬ場合にも、代名詞の「數」は甚だ明瞭に存在すると云ふ點にその反映を見出すのである。^{**} 或は複數法が二種あつてその一つは代名詞

* Kawi-Werk II, 317, 376.

** Boas, Handbook I, 683; Codrington, Melanesian languages, 110; v. d. Gabelentz, Die melanesischen Sprachen, 37; v. d. Steinen, Bakairi-Sprache, 324, 349.

に専用せられる場合もある。^{*} 更らに名詞の「數」は生物のみに用ひられ、無生物には用ひられぬと云ふ場合も認められる。^{**} 又ヤクト語に於ては身體部分若くは衣服等が一個人に屬する場合には單數を用ひ、多人數に屬する場合には複數を用ひると云はれるのである。^{***} これらの場合は何れも人に關する關心が物に對するそれよりもより重要であることを示すものと云ふことができる。原始民族の數詞が「二」若くは高々「三」を出でないのは、數概念の根源がこの人稱的對立の基礎の上に置かれるためであると考へることはできないであらうか。^{****}

* J. J. Schmidt, Grammatik der tibetischen Sprache, 63.

** Fr. Müller, Grundriss II, 1, 261; II, 1, 314; III, 2, 50; v. d. Gabelentz, a. a. O., 87; Boas, Handbook I, 104; Victor Henry, Esquisse d'une grammaire raisonnée de la langue aléoute, 13.

*** Boethlingk, Sprache der Jakuten, 340.

**** Fr. Müller, Grundriss I, 2, 26; Die Papiasprachen, Globus, Bd. 72, 140; Sayce, Introduction to the science of language I, 412; Ray, Torres-Expedition III, 46, 288, 306, 345, 373; v. d. Gabelentz, a. a. O. 258.

既に發達せる數詞の系列を構成せる言語に於ても、一及び二若くは或る場合には三乃至四までを異る文法的形式によつて區別するものがある。セム語に於ては一及び二は形容詞であり、爾餘は抽象名詞によつて表現される。^{*}原始印歐語に於ても、インドイラン語、バルトスラヴ語、ギリシヤ語等に於ては一乃至四は變化的形容詞で表はし、五乃至十九は不變的形容詞、それ以上は名詞を使用することになつてゐる。^{**}又「二數」の如き文法的形式も他の品詞に對してよりは人稱代名詞に於て永い間殘留するのである。即ちスラヴ語、フィンランド語に於ては「主觀的二數」は「客觀的二數」が消失せる後の時代まで繼續した。^{***}又獨逸語に於てはウエストフアリア、バヴァリア、オーストリア等に於て今日

* Brockelmann, Grundriss I, 484; II, 273.

** Meillet, Einf. in die vgl. Grammatik der indogerm. Sprachen, 252; Brugmann, Kurze vgl. Grammatik, 369.

*** Miklosich, Vergl. Grammatik der slawischen Sprachen IV, 40; Szannyei, Finnisch-ugrische Sprachwissenschaft, 60.

なほこの種の「二數」を見出すことができる。^{*}更らに獨逸語 *Zwei* の語源は *Du* であると云ふ説をなす人さへ現はれてゐる。^{**}シエラア (Scherer) はこゝに二と云ふ數の心理學的文法的數學的發生の共通根源が存すると考へた。何となれば言語の本質はフンボルトの云ふやうに話者と聽者即ち「我」と「汝」との間に生ずる緊張状態が、發語の機能を中介として再度そこに平衡状態を取戻す過程のうち存するからに他ならぬと。^{***}

フンボルトはその「二數」に關する論文に於て始めて「二數」がその客觀的起源の他になほ主觀的起源を有するものなることを指摘した。^{***}この客觀的な「二

* Grimm, Deutsche Grammatik I, 339.

** Benfey, Das indogermanische Thema des Zahlworts 'zwei' ist du, Göttingen, 1876; Brugmann, Grundriss II, 2, 8; vgl. v. d. Steinen, Die Bakairi-Sprache, 352.

*** Scherer, Zur Geschichte der deutschen Sprache, 308, 355.

**** Humboldt, Ueber den Dualis, Werke VI.

數」と云ふのは現在でも或る種の原始的言語に見られるやうな眼、耳、肩、胸、膝、足等自然的に一對をなすやうな身體部分、若くは特殊の道具等に與へられるものであるが、印歐語等に於ては前にも述べたやうに早く消滅に歸したのである。ギリシア語にあつてはホーマア時代既にその解體を開始し、最も永く殘存したと云はれるアッティカ(Athica)語に於ても紀元前四世紀の頃には既に全く亡びて了つた^{**}。かく客觀的二數なるものが特殊的文法形式として永くその生命を保ちえないのは、言語的思惟が漸次數學的論理的な普遍的數體系に影響せられる結果であると考へられる。然るにこの影響に對して主觀的二數なるものがこれとは比較にならぬほど強固な抵抗を續けてゐると云ふことは、我々をし

* Meinhof, Bantugrammatik, 8.

** Brugmann, Griechische Grammatik³, 371; Meillet a. a. O., 6; Fr. Müller, Der Dual im indogermanischen und semitischen Sprachgebiet, Sitzungsberichte der Wiener Akad., Philos.-hist. Kl., Bd. XXXV.

てそこに人稱關係の特殊性を想定せしめずには置かないであらう。このことは更らに人稱的な「三數」及び「包含的」乃至「除外」複數なるものゝ存在によつて裏書される。メラネシア語の如きに於ては第一人稱複數中に話者が含まれるか除外されるかによつてその語形を異にする^{*}。オーストラリア土語に於ては單數複數の他に二數及び三數が區別せられ、なほ三數はそのうちに聽者を含むか含まぬかによつて更らに二つの形を與へられる^{**}。同様の現象はその他至るところにこれを認めることができるのである^{***}。これらの例によつても我々は人

* Codrington, Melanesian languages, 111; Ray, Torres-Expedition III, 428.

** Matthews, Aboriginal languages of Victoria, J. and Proceed. of the R. Soc. of N. S. Wales XXXVI, 72, 155, 162.

*** P. W. Schmidt, Die Mon-Khmer-Völker, 50; Boas, Handbook I, 573, 761, 815; v. d. Steinen, Kakiri-Sprache, 349; Humboldt, Kawi-Werk II, 39; vgl. auch Fr. Müller, Grundriss II, 1, 76; v. d. Gabelentz, Die Sprachwissenschaft, 296.

間的關係が言語構成に對して如何に重要な役割を演じてゐるかを痛感せざるを得ないのである。

一般に言語的數概念の構成はそれが空間的にせよ時間的にせよ或は又主觀的起源を有するものにせよ、それは常に直觀的具體的な事情に従つて先づ特殊的形態として發生する。従つてそこには數學的數概念の論理的屬性と考へられる普遍妥當性もなく必然性もなく又各項の等價性もその無際限的添加可能性もこれを認めることはできない。換言すればそれは眞の意味に於ける數若くは量の表現ではなくむしろ性質的差異の表現と云はなければならぬ。この量を質によつて表現すると云ふことは、これは純粹數領域の問題ではないが、かの形容詞の比較級の構成に於て語源的に異なる語根が用ひられると云ふ事實にも認められるところである。英語の *good* と *better* 拉典語の *bonus*, *melior*, *optimus* は各々その語源を異にする。分量的差異がこゝでは別々の直觀に於て與へられる。

それは「多い」「少い」の連續的程度の相異ではなく、各項が「別種」として認識せられるのである。^{*}比較級乃至最上級を構成する形式的規則を有せざる言語に於ては、或るときは「優る」「超える」等の動詞が用ひられ、^{**}或るときは比較を意味する副詞が用ひられ、^{***}又或るときは二項の單なる羅列に止るものもある。^{****}而してこれらの性質的差異を表はす語としては空間的高低上下を意味するものが頗る多さを占めてゐる。^{*****}ブルグマンによれば印歐語の比較級後綴 *-ero-*, *-tero-*

* vgl. Osthoff, Vom Suppletivwesen der indogermanischen Sprachen, 49.

** Meinhof, Bantugrammatik, 84; Westermann, Ewe-Grammatik, 102; Golasprache, 39, 47; Roehl, Schambala-Grammatik, 25.

*** Migeod, Mende Language, 65.

**** Roehl, a. a. O. 25; Codrington, Melanesian languages, 274; Gatschet, Klamath language, 520.

***** Reinisch, Nuba-Sprache, 31; v. d. Gabelentz, Melanesische Sprache, 60.

の如きも場處的副詞から由來すると云はれるのである。^{*}こゝにも亦言語的思惟は、論理的思惟ならば當然純粹關係概念を要求するところを空間的な直觀に訴へる例が認められる。かくて言語が初めかゝる意味に於ける直觀世界に誕生して、それが漸次精神的内容を表現し、一つの象徴體系を構成するに至るまでには頗る永い發達の時期を必要としたと云はなければならぬ。

第四節 言語と「内部直觀」の領域——自我概念の諸相

一、言語的表現に於ける「主觀性」の發達

以上我々は言語的世界構成の客觀的方面に關して考察して來たが、客觀と主觀とはもと相關々係にあるもので、この方面に於て既に主觀の役割が頗る重要

^{*} Brugmann, Kurze vgl. Grammatik, 321.

であることを認識したのである。文法的には人稱代名詞は代名詞と云ふ名が示すやうに名詞の代理として單なる派生的從屬的な地位を與へられ易いが、既にフンボルトも指摘したやうに言語は話者の人格的發露であつてそこでは主觀が第一義的な意味を有することを忘れてはならぬ。^{*}この意味に於て人稱代名詞を以て言語的創造に於ける最も根源的な構造であると考へる學者も尠くない。^{**}かく自我感情は言語的創造の礎石となるものであるけれども、併しそれが最初から文法的な人稱代名詞の第一人稱主格として顯はな形を以て登場すると考へるのは誤である。兒童の言語發達に於てもかゝる語の出現は比較的後期に屬するのである。それは凡ゆる言語的表現を媒介として漸次一定の形に纏め上げら

^{*} Werke VII 1, 103; VI 1, 26, 304.

^{**} Grimm, Deutsche Grammatik I, 335; Scherer, Zur Geschichte der deutschen Sprache, 215.

れる。先づ自我の表現はその最初の段階に於ては素樸的思惟の常例として對象的規定から獨立することは困難であるやうに見える。自我感情はこゝでは自己の身體と密接な關係に置かれるのである。アルタイ語系に於ては「我」はわが「身」、わが「胸」等を意味する名詞によつて表はされる*。ヘブライ語の再歸代名詞は「心」を意味する名詞によつて表はされるばかりでなく、又これと同義語たる「人」「もの」若くは「頭」「顔」「肉」「心臓」等によつても表はされる**。その他「我」を「身體」を意味する語で表現する言語の數は尠くない***。拉典語の *persona* が顔若くは芝居の面を意味したと云ふことは遍く人の知るところであ

* Winkler, Der ural-altaische Sprachstamm, 59, 160.

** Brockelmann, Grundriss II, 228, 327.

*** Steindorff, Koptische Grammatik, § 88; Ermann, Aegyptische Grammatik, 85; Brandstetter, Indonesisch und Indogermanisch im Satzbau, 18; Whitney, Indische Grammatik, 190; Delbrück, Vergl. Syntax I, 477.

らう*。これらの多くの場合に於て「自我」「精神」「人格」等は身體と密接に結合し、宛も神話的世界觀に於てこれらが身體の影 (*Doppelgänger*) の如く考へられるのに對して好個の對照をなしてゐる。従つてその文法的形式も永く名詞のそれと區別せられず、代名詞は名詞の數、性、格と同様の變化に従ふものとせられた**。この現象と類似し而もその發達段階を異にするものとしてこゝに注意して區別しなければならぬのは、代名詞を儀禮上他の名詞若くは或る場合には副詞によつて置替へる場合である。例へば「我」を「僕」と云ひ「汝」を「主人」と云ふ。フンボルトはこれを半文明の状態に現はれる現象となした***。ホフマン (*Hoffmann*) によれば特に日本語に於てはこの現象のために眞の代

* Grimm, Deutsch. Wörterbuch VII, 1561.

** Wundt, Sprache II, 47 參照。

*** Werke VI, 1, 307; Kawi-Werk II, 335.

名詞の使用は全然掩蔽せられてゐると云はれた*。

多くの言語はその名詞形又は動詞形に於てこの人格的なものに對してその言語の使用者が有する繊細な感受性を反映する。これらの場合そこに支配する區別原理は單なる生物學的な生物と死物との區別ではなく、むしろ意欲の働き方に於ける微妙なる變化であることがわかる。バントゥ(Bantu)語に於ては特定の前綴を用ひて生物を獨立に行動する人間と然らざるものとに二分する。從つて人間でも使者や代理人の如きは後者に屬する*。メラネシア語に於ては個人や種族の名に對して特定の冠詞を使用するが、樹木や船や武器等に對してもそれらが固有名を有するやうな場合にはやはりこれと同じ冠詞を與へるのである***。

* Hoffmann, Japanische Sprachlehre, 75.

** Meinhof, Bantugrammatik, 6.

*** Codrington, Melanesian languages, 108; Brandstetter, Der Artikel des Indonesischen, 6, 36, 46.

アメリカ土語中フーバ (Hupa) 語に於ては二種類の三人稱代名詞が區別せられ、一つは種族の壯年男子に對し他は老人子供或は他の種族のMEMBA若くは動物等に對して適用される*。オーストラリア土語に於ても人を單なる存在と見るときと行爲者と見るときとは別の名詞形が用ひられ、例へば遠くに見える人について「あれは誰れか」と云ふ問の答には一方の形が、又「誰れがこのカングルーを殺したか」と云ふ問の答には他方の形が用ひられる**。同様の區別は動詞形についてもこれを認めることができる。或るインドネシアの方言に於ては事件が一定の行爲者によつて惹起せられるか又は自然的經過として起るかに從つて二種類の受動相が區別せられ、又ヌーバ (Nuba) 語に於てもこの受動相

* Boas, Handbook I, 117.

** F. Müller, Novara-Reise, 247; Matthews, Aboriginal languages of Victoria, 78, 86, 94.

*** Codrington, 183; Brandstetter, Sprachvergl. Charakteristik eines indones. Idioms, 37.

と自然相との區別は頗る明瞭であると報告せられてゐる。^{*} これらの例によつても明かなやうに自我若くは行爲者の認識は形式的な代名詞形の發達せざるころにもなほ頗る繊細なものがあることを認めざるをえないであらう。

この間の事情を明かにするために我々は動詞の諸相及び諸態について更らに詳細なる考察を進めて行きたいと思ふ。アリストテレスに於ける能動所動の範疇を言語的能動相所動相の概念に則つたものとする説があるが、ギリシヤ語の所動形は、形の上に於ても意味の上に於ても他の動詞形から區別することが困難なものであつて、恐らく能動形及び中間形から漸次發展して來たものであると思はれる。^{**} 他種の言語に於ても能動所動の對立は決して根本的なものではなく、他の多くの對立中の一種に過ぎない。マレイ語系アフリカ語系等に於ては

* Reinisch, Nuba-Sprache, 63.

** Brugmann, Griech. Grammatik, 458.

眞の意味に於ける所動形は充分に發達してをらず、これは元來から受動的な含蓄を有する能動動詞の三人稱によつて代用される。^{*} 支那語に於ては文章の文脈から所動が理解されるか、或は見る、被る、爲る、所となる等他の動詞を使用して間接的にこれを表現する。日本語に於ても亦「得る」若くは「在り得る」(ある)と云ふやうな動詞によつて複合的な動詞を作るのである。^{**} 併しながら能動形所動形の區別が明かでないと言ふことはその言語が行爲一般のニュアンスに對して敏感でないと言ふことを示すものではない。むしろ或る場合には動詞の諸態が著しく複雑に發達してゐるのを見出すのである。動作の時間的性質に關して完了形、不完了形、瞬間形、連續形、一回形、反復形等が區別せら

* Codrington, 191; Westermann, Sudansprachen, 70; Migeod, Mende language, 82; Fr. Müller, Novara-Reise, 98, 254; Humbolt, Kawi-Werk II, 80, 85.

** v. d. Gabelentz, Chinesische Grammatik, 113, 428; Hoffmann, Japanische Sprachlehre, 242. (これは歐人日本文法家に有力なる説、而して得るは所得の意味に解されてゐる。)

れることについては既に述べたが、或る種の言語に於ては更らに靜止形、始動形、終了形、慣用形等の諸態が區別される*。かくこれらの言語は動作の客觀的姿態に對して敏感であるのみならず、その内的な主觀的差異に對してもこれに劣らぬ關心を示してゐる。彼れらが表現せんとするところが確定的であるか、問題的であるか、單なる引用に過ぎないか、又悲觀的であるか、有望的であるか、更らに嘆願であるか、希望であるか、命令であるか等に從つて夫々異なる動詞形が使用せられるのである**。

自動他動の區別に關しても單なる二分法ではなくそこに甚だ複雑な程度の差異が表現せられる場合が多い。元來は自動的な動詞の語幹からその語幹音の反

* Reinisch, Nuba-Sprache, 53, 58; Hanoteau, Grammaire Kabyle, 122.

** Brugmann, Kurze vgl. Grammatik, 578; Powell, The evolution of language, 12; Boas, Handbook I, 105, 124, 247, 443; J. J. Schmidt, Grammatik der mongolischen Sprache, 74; Thumb, Handbuch des Sanskrit, 385.

復により或は特定の語音の添加によつて、始めは單なる強勢的意味を有する動詞が導かれ、更らにこれを變形することによつて使役的意味の動詞が作られる。而もこの使役的なものについても亦同様の手段によつて更らに幾つかの段階が區別されるやうになる*。使役の主體に關してもそれが獨立に行爲する場合と他者に促されて行爲する場合とを區別するためにタガル (Tagal) 語に於けるが如く異なる前綴によつて他動詞の種類を二種に分つ場合が認められる**。或は單獨的行爲と集團的行爲とを區別するためにベダウエ (Bedauye) 語ヤクト (Jakut) 語タオリピ (Taoripi) 語等に於けるが如く特に集團的動詞を構成する場合もあ

* Aug. Müller, Türkische Grammatik, 71; Brockelmann, Grundriss I, 504; Dillmann, Aethyopische Grammatik, 116.

** Humboldt, Kawi-Werk II, 143.

*** Reinisch, Bedauye II, 130; Boethlingk, Sprache der Jakuten, 364; Ray, Torres-Expedition III, 340.

る。又オーストラリア土語に於ては行爲が一方的に主語から客語に及ぶのみであるか、或は兩者の間に交互作用の關係が成立するかに従つて異なる動詞形を用ひる場合が見出されると云ふ*。この最後の場合に於て主體と客體とが同一者である場合にはそこに再歸動詞を生ずるわけであるが、この再歸形は獨立の所動形を有せざる言語に於ては屢々これを代理するのである**。然るに他方に於て又この形は最も主觀的な體驗の表現に使用される。ギリシヤ語若くはサンスクリットに於ける動詞の中間相 (Medium) の如きがその適例と云ふことができる。これらの言語に於て能動相は元來自動的であるか他動的であるか判然と決定することができない。「我れ見る」と云ふときそれは我れが我が眼で見ると云ふ點にアクセントを置くのであるか、或は我れが何物かを見ると云ふ點にアクセントを置くのであるか、或は我れが何物かを見ると云ふ點にアクセントを置くのであるか明かでない。然るに例へば *καίωμαι* と云ふ中間相に於ては明かに我れが我が心のうちに於て泣くと云ふことが強調せられるのである。この意味に於て、喜ぶ、悲しむ、驚く、恐れる、望む、留まる、休む、語る、着る、洗ふ等について多くの言語が一致してこの中間相を構成する所以を理解することができらう*。これら多くの動詞の諸態は更らに結合してなほ多くの新しい形式を創造する。例へば所動と使役とから使役的所動が、使役と再歸とから再歸的使役が作られる如きがその例である**。これを要するに言語的思想は主觀と客觀、活動と存在とを獨立せる二つの領域と考へることなく、その間にもつと力動的な交互的關係を把握して、そこに統一的全體的な精神的表現の世界を作り出してゐると云ふことができる。

* Mathews, a. a. O. 69.

** Dillmann, Aethyopische Grammatik, 115, 123; Nöldeke, Syrische Grammatik, 95; Aug. Müller, Türkische Grammatik, 76.

* Grimm, Deutsche Grammatik I, 598.
** カム語以外に於て Boethlingk, Sprache der Jakuten, 291; Aug. Müller, Türkische Grammatik, 71; Reinisch, Nuba-Sprache, 62.

二、人稱的及び所有的表現

自我感情は言語構成の過程に於て根源的意義を有するにも拘はらず、それに對して獨立的な言語的表現が與へられるためにはフンボルトも指摘したやうに相當困難な事情が存すると云ふことを見逃すことができない。何となれば自我の本質は主觀であると云ふところに存するのに、一方に於て思考乃至言語過程に於ては凡ゆる概念が思考する主觀、言語する主觀に對して一つの客觀でなければならぬからである。^{*}この矛盾を克服するために言語はその初期に於ては主觀たる自我を客觀たる對象的概念のうちに表現する。その最も著しい例證として人稱代名詞が初め所有的代名詞として發生すると云ふ事實を擧げることができる。所有の概念がこの意味に於て主觀と客觀との媒介的位置にあることは

^{*} Humboldt, Werke VI, 1, 306.

見易きところである。所有される事物は單なる事物ではなく、それは既に幾分なりとも人的契機をそのうちに包含する。この所有概念による自我概念の媒介は、先づ幼兒の言語に於て所有的表現が主格的表現よりも著しく早期に發達すると云ふ事實に於て認められる。^{*}言語史的に見ても判然たる自我概念の發生以前「我」と「我の」、「汝」と「汝の」とが無差別的に使用せられる時期が見出される。^{**}又或るときは動詞の不定形に特定の所有的添綴を附して「我れ歩む」と「我が歩み」若くは「彼れ歩む」と「彼れの歩み」等を同一形式によつて表現する。^{***}更らに多くのアメリカ土語に於けるが如く身體部分の命名には常に所有格的規定が不可分的に融合してゐると云ふやうな場合もある。手は常に誰れ

^{*} Stern, Kindersprache, 41, 245.

^{**} Humboldt, Werke VII, 1, 231 ; v. d. Steinen, Bakairi-Sprache, 348, 380.

^{***} Winkler, Der uraltaische Sprachstamm, 76, 171 ; Fr. Müller, Grundriss I 2, 12, 116, 142, 153 ; II 1, 188 ; III 2, 278 u. ö.

かの手、即ち「我れの手」「汝の手」「彼れの手」「我々の手」であつて何人にも屬せざる一般的な手と云ふものに對する表現は存在しない。シュタイネンはバカイリ土人に自分の手、相手の手、第三者の手を指示してこれは何かと問ふならば各々異なる三様の答を得るであらうと書いてゐる。同様の事實はメキシコ語に於ても、ヤクト語に於ても、亦メラネシア語に於ても認められる。而してこの名詞と所有代名詞との密接な融合は單に身體部分の表現に現はれるばかりでなく、又自我と密接な關係にあるものゝ表現、例へば父母等を表はす語に於てもこれを認めうるのである**。

一般に原始的心性は所有せられる物の性格に従つて異なる所有概念を個別的に

* Powell, Introduction to the study of Indian languages, 18; Boas, Handbook I, 103; v. d. Steinen, Unter den Naturvölkern Zentral-Brasiliens, 22; Boethlingk, Sprache der Jakuten, 347; Codrington, Melanesian languages, 140.

** Reinisch, Nuba-Sprache, 45; Boas, Handbook I, 103.

構成する。手が自我に所屬するのと武器や道具が自我に所屬するのとはその様相を異にする。両親や子供、馬や犬、或は家や着物が自我に所屬するのは夫々その所屬の意味が違ふと考へなければならぬ。かゝる所屬の相異に應じて多くの原始的言語は夫々異なる所有的添綴を使用するのである。例へばメラネシア語ポリネシア語等に於ては親族關係、身體部分、道具、食物、飲物等が各々別の語源的には名詞的な後綴によつて區別される*。或は同じくメラネシア語及び或る種のアメリカ土語に於ては本來身體等に所屬するものと人爲的に自我によつて所有されるものとが區別せられ、又人爲的なものゝうちに於ても生物と無生物とが區別せられる**。又アリューシャン語に於てはこの種の相異、及び所有者が單數なるか二數なるか複數なるかに従つて九つの所有代名詞が存在すると云

* Ray, The Melanesian Possessives, American Anthologist XXI, 349.

** Codrington, 129; Boas, 258, 393, 946.

はれる。^{*}これらの例からも明かなやうに所有の表現は始め異質的な個的直観から出發して漸次一般的な所有概念を構成し、更らにそこからより一般的な關係の概念にまで發展する。これは恰も數の表現が始め異なる内容に對する個別的な數概念から出發して漸次に一般的な數詞を作り、そこから更らに純粹關係の表現たる數體系にまで發展するのと同様の關係にある。かゝる發展の過程のうち、一方に於てはこれと平行して、凡ゆる所有關係に遍在的な統一的關係點としての「自我」がそれ自らを確立するのである。

三、言語的表現に於ける名詞型と動詞型

かく自我の統一は一方に於ては所有的客體の表現を媒介として把捉せられる

^{*} Victor Henry, *Langue aléoutique*, 22 ; vgl. auch Boas, 1021 ; Szinyei, *Finnisch-ungarische Sprachwissenschaft*, 115.

と同時に、他方に於ては又多くの活動の依憑點として動詞的表現を媒介として把捉される。一體言語の起源は名詞的であるか動詞的であるかと云ふことは言語學上及び言語哲學上反復して論議せられた問題である。近代に於てもグラスリ (Grasserie) の如きは言語は先づ動詞から發達する、何となれば我々にとつて直接に與へられるものは變化であり活動であつて、物やその性質は前者を通して間接に認識せられるに過ぎないからであるとなした。^{*}これに反してヴェントの如きは兒童の言語も原始民族の言語も共に言語が對象的表象から出發することを示唆すると説いてゐる。^{**}嘗て言語學上言語が幾つかの原始的語根から漸次構成せられたと云ふ説が行はれたが、^{***}言語研究の發達と共にかゝる原始的語根

^{*} Grasserie, *Du verbe comme générateur des autres parties du discours*, Paris, 1914.

^{**} Wundt, *Die Sprache*² I, 594.

^{***} 例へば Ludwig Noiré, *Die Ursprung der Sprache*, 311, 341 ; Max Müller, *Das Denken im Lichte der Sprache*, 371, 571.

なるものは現實に存在せるものでなく、單に言語學がその所見を整理するため
に設定するところの方法論的産物であることが明かにせられ、従つて今日かゝ
る説を信奉するものはその影をひそめたと云ふことができる。これと同様に原
始的言語として純粹に動詞的なもの或は純粹に名詞的なものと云ふが如きはこ
れを如實に見出すことができない。かゝる意見は言語が與へられたる物若くは
活動等をそのまゝ反映するとする模寫說の見地に立つとき始めて問題となると
ころであつて、既に模寫說の支持し難きを知つたものにとつては全然その意味
を失ふと云はなければならぬ。「物」も「活動」も「状態」も「屬性」も獨立
せる意識的存在ではなく意識構成の相關的契機に過ぎない。従つて言語的思惟
も亦これらの一つを抜き出してそれを出發點として言語的世界を構成すると云
ふが如きことはありえないのである。言語はその原始的段階に於てかゝる範疇
的相異に對して頗る無關心であるのを通例とする。多くの言語に於て同じ單語

が何等の變化なしに名詞としても動詞としても副詞としても前置詞としても用
ひられる。或は名詞文と動詞文とを判然と區別することができない*。馬來語に
於ては凡ゆる動詞は特定の前綴によつてそのまゝ名詞として使用することがで
きる**。コプト (Kopt) 語に於ては動詞の不定形は性を有し、又それが他動詞で
ある場合には目的格を支配せず名詞の二格に直接接續せしめられる***。或は動詞
が格を表はす後綴を採り名詞の如く變化する場合、逆に名詞が時を表はす添綴
によつて動詞の如く變化する場合等が擧げられる****。アナトム (Anatom) 語に

* Humboldt, Einleit. zum Kawi-Werk, W. VII 1, 222, 280, 305; Kawi-Werk II, 81, 129,
287; Fr. Müller, Grundriss I 2, 12, 142; II 1, 115; II 2, 174; Nöldeke, Syrische Gram-
matik, 215.

** Humboldt, Kawi-Werk II, 81, 348.

*** Steindorf, Koptische Grammatik, 91.

**** Fr. Müller, Grundriss II 1, 115, 180; III 1, 198.

於ては所謂動詞變化をなすものは動詞ではなく、むしろ代名詞が一人稱、二人稱、三人稱、單數、二數、三數、複數に従ひ又現在、過去、未來及び意志形によつて動詞の如き變化を示すのである。^{*}この他形容詞が動詞の如き變化をなす場合は頗る多く、^{**}又複雑なる句若くは文章全體が所謂動詞變化を示す場合があるとさへ報告せられてゐるのである。^{***}

これら多くの例を通じて明かなやうに言語はその初發段階に於ては頗る融通性に富み、むしろ無形態であるかの如き觀を呈する。併しそれはこれらの言語を發達せる言語と比較するためであつて、そこには夫々異なる言語構成の方向が認められるのである。この意味に於て言語を名詞型若くは動詞型に大別するこ

* G. v. d. Gabelentz, Die Sprachwissenschaft, 160.

** 例へば Grasseire, op. cit. 32 參照。

*** V. Henry, Langue aléoutique, 60.

とはむしろ正當であると云はなければならぬ。素より前述の如く言語構成はその凡ゆる契機が共働することによつて始めて可能なのであるから、それはどこまでもそこに働く主要契機が何であるかと云ふことによつてのみ決定せられるに過ぎない。名詞型に於ては主として對象的直觀の契機がプレヴェイルする。動詞型は過程を客觀的事件と見るか、主觀的活動をその中心に置くかに従つて更らにこれを二分することができる。先づ名詞型について述べると、その最も著しき例はウラル・アルタイ語系である。ウィンクラアがその代表として日本語について語るところによると、その文章構造は名詞的なもの、並列に過ぎない(?)。非常に複雑微妙なる内容でさへも常に一個の名詞文として表現せられる。そこでは「降る」と云ふ動詞の不定形に「雪の」と云ふ名詞の二格を先行せしめ、「見る」と云ふ不定形に「我が」と云ふ二格を先行せしめるのみにて過程乃至活動が表現される。數を表はすためには「五つ」即ち *piece* と云ふ

名詞の二格に「石」や「豆」等の名詞を接続せしめ、「皆」「多く」等の如き名詞の二格に「人」や「鳥」と云ふ名詞を接続させる。或は複雑なる文章の最後に動詞の不定形を置きこれを名詞に先行せしめることによつて凡ゆる内容を形容詞的表現に變化せしめ、又かくして成立せる名詞句に「ある」「ない」等を附してその存在を肯定し若くは否定することによつて全體的文章を名詞文的に構成する。^{*}否定形の作成に於て又動詞の「時」及びその他の諸態の作成に於て同様に名詞的な構造が認められる。^{**}こゝでは凡ゆる表現が存在的規定であり或

* Winkler, Der Uralaltaische Sprachstamm, 152, 157, 166, 199; Hoffmann, Japanische Sprachlehre, 66; vgl. Boethlingk, Die Sprache der Jakuten, 299.

** Winkler, a. a. O. 199; 125, 208. ウィンクラアによれば日本語の否定形は *i(n)* 若くは *si(su)* 等存在を表はす動詞の語幹に否定記號たる *ko* を先行せしめ、*ko+i(n)* (*ni*), *ko+si(su)* (*zu*) を作る。これは「無の存在」を意味するものであると。動詞の時及びその他の諸態に關する論も概ねこれに類してゐる。一般に彼れの叙述は所謂「有・得・爲説」の極めて素樸的な段階に立脚せるものであることをこゝに注意して置きたい。(譯者)

はその單なる並列に過ぎないと云ふことができる。

これに反して多くのアメリカ土語の如きにあつては凡ゆる表現が悉く動詞的色彩を與へられる。フンボルトがメキシコ土語について述べたところによると凡ゆる内容が一つの動詞を中心としてこれに對して補充的に添加せられ頗る複雑なる合併語を構成する。この動詞的な合併語を構成すると言ふことはこの言語に對する本質的規定であつて、そこでは單獨な動詞形と云ふものはこれを考へることができない。従つて「喰べる」「與へる」等の動詞を一般的に表示せんとすれば、それらは常に *ta* (何かを) *to* (誰れかに) 等の不定的な補充語と共に與へられる。例へば *ni-tla-gua* (私は—何かを—喰へる) と云ひ、*ni-to-tla-maca* (私は—誰れかに—何かを—與へる) と云ふ。而して實際の會話に於てはかゝる圖式的單語文中の小詞を具體的内容を有する單語によつて置き替へる。恰もそれは數學に於て方程式中の a, b, c 等に一定の個別的數値を當て嵌めるの

に似てゐる。かゝる方法を學者は肉付けの方法 (Einverleibungsmethode) と名
け、この種の言語を一般に多數綜合的若くは輯合的言語 (Polysynthetismus)
と名けた。^{*} この多數綜合的言語が動詞をその構成の中心に置くこととは初
めに述べた通りであるが、併しこゝではなほ動詞は自我の活動の表現として
はなくむしろ客觀的な過程の表現として用ひられてゐるのである。それは例へ
ば動詞の數が主格の數に一致せしめられずむしろ目的格の數に一致せしめられ
ると云ふ事實に於ても明かに認めるところであらう。のみならずかゝる言語
に於ては主格そのものが既に頗る未分化的な状態に置かれてゐる。クラマス語

^{*} Humboldt, Einleitung zum Kawi-Werk, W. VII 1, 144; Lucien Adam, Etudes sur six
langues américaines, Paris, 1878; Brinton, On polysynthesis and incorporation as
characteristics of American languages, Transact. of the Americ. Philos. Soc. of Philadel-
phia XXIII, 1885; Boas, Handbook I, 573, 646, 1002; v. d. Steinen, Unter den Natur-
völkern Zentral-Brasiliens, 78.

に於ては動詞は如何なる主格に關係せしめられる場合にも歐洲語に於ける不定
形の如き形を探る。又マヤ (Maya) 語に於ては「汝が我が父を殺した」と云ふ代
りに「汝の殺したのは我が父だ」と云ふ。この場合の「汝」は動詞の不定形に添
加せられる所有格的前綴として表はされ、そこにはなほ「汝」と云ふ主語は獨
立してゐない。馬來語に於ても亦これと全く同様の構造が見出されると云ふ。^{*}

活動の主體が所有格的添綴として動詞と融合してゐる間は主觀は客觀的過程
からそれ自身を引き離すことができない。これは人稱代名詞の獨立によつて始
めて主觀が客觀に對してその地歩を確立するのである。而してこの人稱代名詞
の獨立と共に動詞はそれに相應する變化を要求される。こゝに自我の活動を中
心とする新しき綜合が發生する。併しかゝる發展の過程は一朝一夕にして成し

^{*} Gatschet, Klamath language, 434, 572; Seler, Die Konjugationssystem der Maya-Sprache,
9, 17; Humboldt, Kawi-Werk, II, 80, 350, 397. (マヤ語も亦この種類に屬する。)

遂げられるものではないのである。それは先きに動詞の発展について、それが所動能動、自動他動に對して無記なる中間相から出發して漸次にこれらの區別を獲得すると述べたその同じ過程のうちに、主觀も亦漸次その諸機能を明かにして行くことによつて始めて可能であると云はなければならぬ。

第四章 概念的思惟の表現としての言語――

言語的概念構成並びに類構成の形式

第一節 性質的概念構成

概念構成の問題は言語哲學と論理學とが最も緊密に關係する領域である。概念の論理的分析は結局語若くは名の問題に直面し、而して徹底せる唯名論は概念の内容を語若くは名のうちに見出した。ホッブスの如きは *veritas in dicto*, *non in re consistit* (眞理は言語のうちにあり、事象のうちにあるのではない) と主張するに至つた。併しながらこの唯名論の主張は一つの循環論の上に築かれてゐると云ふことを見逃すことができない。何となれば言語の成立にはそれ

が説明せんとする概念作用そのものを必要とするからである。この全體的見地に於て認められる循環論は更らに個々問題の解明に對しても再度その姿を現はして來る。傳統的論理學は概念の構成を抽象作用に歸せしめんとするけれども、この類似的標徴を抽出する所謂抽象作用なるものは既に概念作用をその前提として必要とするものではないであらうか。こゝに於てジグワルト(Sigwart)の如き、抽象説を批評してそれは先づ第一に類似的標徴を抽出するためには既にかゝる標徴に關する概念を必要とすると云ふことを忘れてをり、又第二に類似的標徴を抽出するためにはそこに比較考量せらるべき對象の範圍が少くとも大體に於ては決定せられてゐなければならぬから、その際既にかゝる範圍に入る對象の類似性が豫想される筈だと云ふことを忘れてゐると云はなければならぬ、従つて概念構成を抽象若くは比較から理解しようとする説は何等かの形に於て、多くは言語的概念として、既に有するところのものを更らに追ひ求める

と云ふ矛盾に陥るのである、それは自ら鼻の上にかけてゐる眼鏡をその眼鏡を通して探し求めるにも等しいであらうと説いた*。然らばこの既成の概念そのものが如何にして成立するかと云ふことは未だ解明せられざる問として再度新しく我々の回答を要求するのである。傳統的論理學は概念を知覺に與へられたる區分の單なる模寫とは考へないから、その發生の場處をより高次的な知的業作中に定位する。多くはこれを最近類と種差とによる定義作用の結果と考へる。而してそれと同時に概念の本質的特徴として一般性と云ふことを擧げるのである。然るにこれがちそきに失すると云ふことは前述ジグワルトの議論からも明かなところであらう。概念が單なる知覺でないことは云ふまでもないが、併しそれは定義作用と云ふが如きもの以前既に發生し、又その本質的屬性も一般性と云ふが如きものに比してより根源的なものでなければならぬ。かゝる根源的

* Sigwart, Logik² I, 320.

な論理的活動は内容の單なる指定であり、従つてその屬性も内容の單なる規定性であると云ふことができる。

この點は特にロツツェ (Lotze) によつて強調せられた。彼れによれば思惟の最初の活動は二つの表象を比較することではなく、一つの表象を論理的な意味に於て設定することであるとされた。この活動が從來の論理學に於て問題とせられなかつたのは論理學の材料たる言語が既にそれを成し遂げてゐるからに他ならぬ。單なる興奮の叫び聲を除外すれば凡ゆる言語は或る程度までそのうちに思惟の根本屬性たる客觀化の形式を備へてゐる。言語的命名作用は多くの表象から論理的な所謂類概念を構成するものではないが、併し個々印象を再認しうるものとして定着しそれに一定の意義を附與するのである。かくて定着せられたる個々内容はそれ自身の同一性を確保するばかりではなく、又他の内容と關係せしめらるべき素地を與へられる。かゝる素地の上に多くの内容が一つの

系列を作り、そこに我々はその系列に共通する一般者を認識する。これをロツツェは「第一一般」(das erste Allgemeine) と名けた。彼れが「第一一般」と云ふのは例へば赤とか青とか音とか云ふやうなもので、これらは併し未だ所謂論理的概念ではない。「動物や幾何學的圖形に關する一般概念は既知の個別表象を結合したり分離したりするところの、即ちそれらを關係付けるところの思考作用を指示することによつて聽者の意識中にこれを惹起せしめることができる。これに反して一般的な青とか一般的な色とか云ふものは同様の方法でこれを他人に告知することができない。赤と黄とが一致する所以従つて両者が共に色である所以は、赤が赤であり黄が黄である所以と不可分的な融合をなしてゐる。兩者に共通するところを兩者と同列的な第三の表象として表象することはできないのである。色だの音だの、一般性を表象せんとすればそれは必ず或る一定の色だの音だのを具體的に表象し、たゞこれと伴隨的に他の凡ゆる色や音

がそれと同等の権利を以て本来非直観的な一般者の直観的見本たりうると云ふ副次的思想を有することによつてのみ可能であると云はなければならぬ。従つて実際には色とか音とか云ふ言葉は一個の完結的表象の形に於ては解くことのできぬ論理的課題を便宜的省略的に指示するものに過ぎない。我々はこれによつて我々の意識に個々の色若くは音を表象し比較することを命じ、且つこの比較のうちにもそれらに共通するところのものを把握せよと命ずるのである。^{*}かくロッツェのやうに考へると、概念の本質は内容の確立若くはその間の關係の確立にあつて、これに一般表象なるものが相應するか否かは心理的偶然に過ぎないことになる。ロッツェは傳統的論理學に忠實なるあまり概念の本質をやはりその一般性に求め、この意味に於て上述のものを第一一般と云ひ從來の一般を第二一般と名けてこれらを共に一般と云ふ概念の下に包括せんとした。然る

^{*} Lotze, Logik², 14, 29.

に第一一般なるもの、成立には所謂一般と特殊、類と個體との間に見られるが如き論理的な包攝關係を想定することはできないのであるから、兩者はむしろ全然別種の働として當然これを區別すべきものなのである。否、概念にとつてはそれが漸次一般化すると云ふことよりも、むしろそれが漸次その内容を正確に確定すると云ふことの方がより本質的であると云はなければならぬ。一般化は確定化の手段であるとさへ云へるのである。凡ゆる思惟はそれが包攝的概括的概念構成を營む以前に於て純粹に性質設定と云ふ作業を開始する。こゝでは命名は物が從屬する類に從つて行はれず、直観的な全體印象中に認められる特定の性質の確定に對して行はれる。我々は未分化的全體中に特定の性質を認めこれを意識の視點に引き留める作用のうちに凡ゆる概念構成の出發點を認めなければならぬ。

狭義に於ける論理的概念構成と言語的な概念構成との相異は、後者が前者に

於けるが如き内容の靜的な比較分類に終始せず、常にそれが独自の力動的契機によつて導かれるところにある。かゝる活動の原動力となるところのものは單なる存在の世界から汲み取られるのではなく、むしろそれ以上に行爲の世界から盛り上つて來るのである。與へられたる對象の世界を整理整頓すると云ふが如きは言語的活動の興味ではなく、むしろ自らの力によつてそこに新しき世界を構成せんとするところにかゝる活動の本質を認むべきであらう。言語哲學の領域に於ては言語的概念構成はフンボルト以來各言語に特有なる内的形式によつて營まれると云ふ説が行はれてゐる。フンボルトが内的形式と云ふのは語音が思想の表現にまで高められる精神活動中に於て恒常的に又一樣的に働くところの形式を出来るだけ系統的に考へたものに他ならぬ*。然るにフンボルトの叙述に於てはかゝる形式はデルブリュックも指摘したやうに、或るときは言語的

* Humboldt, Einleit. zum Kawi-Werk, W. VII, 1, 47.

結合に關する形式と考へられ、或るときは基本的單語の構成に關する形式とも考へられる。即ち文章形態論的な意味か語義論的な意味か、判然としないやうにも見えるのである*。併しながらフンボルトの眞意は主として後者にあると云ふことは彼れの叙述の全體から推して殆んど疑を挿む餘地がない。何となれば彼れによれば凡ゆる言語は對象を知覺せられたまゝに表現するものではなく、常にそれが精神の全體的態度を通じての表現であり、又精神のうちに生産せられる像に關する表現であると考へられてゐるからである**。この意味に於て異なる言語には嚴密な意味に於ける同義語を見出すことができない。凡ゆる語はその語が構成せられる獨特な體系の表現であり、體系は又一般的な物の見方の反映である。ギリシヤ語では月を計るもの(Μηνή)と云ひ、ラティン語ではこれを光る

* Delbrück, Vergleichende Syntax der indogermanischen Sprachen I, 42.

** Humboldt, Einleit. zum Kawi-Werk, W. VII 1, 59, 89, 190 n. 5.

もの (Tuna) と云ふ。これは同一感性經驗が異なる物の見方によつて規定せられる一例に過ぎない。この物の見方に於ける極端に複雑化した構造形式を一つの例について明かにすることは言語哲學の任務でないであらうが、そこに獨特の一般形式を想定することは哲學的興味に對してはその缺くべからざる課題であると云はなければならぬ。この意味に於て言語形式の問題は結局言語的な物の見方の問題であると云ふことができる。ヘルデルによれば言語は人間に對して原本的には自然が人間に對したと同様の關係にあつた。即ちそれは一つのパンテオンである。生きて働く行爲者の國である。言語の世界は神話の世界と同様に客觀世界の反映ではなく、人間の生活、人間の行爲を反映するところに成立する。人間の意志、人間の行爲が一點に向けられ、人間の意識がその一點に集注

* Byrne, General principles of the structure of language, 2 vols. Ldn. 1885 の如きは「の意
味に於ける好著である。

せられるとき、始めてそこに言語的命名の過程が準備せられると説かれたのである。

既に叫び聲と云はれるものにあつても單なる感性的反射を除外すればそれらは意志的方向の表出であり、單なる再生のための記號ではなく豫期を表はす記號たる役割を演ずるのである。従つてそれらは未來の出來事に働きかける動機となることができる。かく音聲が頗る早期に於て既に意志の機關として働きうると云ふ點に、我々はそれが單なる模倣の具でないことを明かに看取することができる。ラツァルス ガイガア (Lazarus Geiger) により更らにルドキツヒノワレ (Ludwig Noire) によつて提唱せられた言語の起源説に於ては原本的語音は存在の客觀的直觀からではなく、むしろ活動の主觀的直觀にその端を發すると説かれた。特にノワレによれば言語が社會的了解の手段として機能しうることは、それが各人に共通的な社會的活動の表現として發生したと云ふ事情を

考へる場合に於て始めてこれを理解することができると主張されたのである。^{*}

ノワレがその説の根據とした人間太初の言語なる假定は前にも述べたやうに今日これを信奉するものがない。併しながら自然民族の言語に關する經驗的研究の成果は、それらが活動の領域に如何に深く根を下してゐるものであるかを示す例證を豊富に提供してゐる。^{**}そこに支配する原理は論理的ではなくむしろ目的論的である。チェイムズは嘗つて概念構成の原理は抽象 (abstraction) ではなく選擇 (selection) であると云つたが、これは言語的概念構成の領域に於て最も明かにその例證を見出しうるところなのである。語は表象世界の與へられ

* L. Geiger, Ursprung und Entwicklung der menschlichen Sprache und Vernunft 1868; L. Noire, Der Ursprung der Sprache 1877, 323; Logos—Ursprung und Wesen der Begriffe 1885, 296.

**特^レ Meinhof, Ueber die Einwirkung der Beschäftigung auf die Sprache bei den Bantustämmen Afrikas, Globus, Bd. 75, 361.

たる區分を模寫せずむしろ表象規定の方向そのものを表現する。この意味に於て言語の世界は神話の世界に類似してゐる。併しながら言語の世界はこの段階を超えて更らに神話の世界には認められぬ全く新しい方向に發展すると云ふことを忘れてはならぬ。神話の世界も亦常に人格的活動を中心として構成せられるが、併しこれは遂にかゝる中心を離れることができない。然るに言語の世界に於てはこの同じ活動を中心として世界構成が開始せられてゐながら、そこに構成されたる言語的成果は次の段階に於てはかゝる中心に對立するものとして或る意味に於ける客觀性を獲得するのである。そこでは人格化の過程と客觀化のそれとが互に交流してそこに一つの精神的全體を織り出して來る。この精神の兩極的な動きによつて世界は初めてその内外の諸相を分化發展するに至ると云ふことができる。

以上言語的概念構成について抽象的にその大綱を考察して來たが、更らにそ

の特質を明かにせんとすればもつと具體的にかゝる發展の過程を跡付けて見る必要に迫られる。言語は單なる性質指定の段階から漸次概括的把捉の段階に、又感性的具體的段階から漸次類的一般的段階へと移り變つて行く。現代歐洲語の如きを自然民族の言語と比較して見るのに、人は後者が前者に比して著しく具體的であり直觀的であり或はむしろ著しく微妙であり豊富であるのに驚くであらう。後者は凡ゆる物の複雑なる性質に對して、凡ゆる出來事の微細なる差別に對して、又凡ゆる行爲の目立たぬ陰翳に對して極めて明快なる表現を與へる場合が多い。我々は既に空間時間數等の表現について又その他凡ゆる言語的表現に關してこの事實を指摘して來た。更らに若干の實例を擧げるならば、例へば或るアメリカ土語に於ては手を洗ふか、顔を洗ふか、食器を洗ふか、衣服を洗ふか、肉を洗ふか等によつて「洗ふ」と云ふ十三種の異なる動詞が區別せら

* Sayce, Introduction to the science of language I, 120.

れる。又肉を喰べる場合、植物を喰べる場合、一人で喰べる場合、多勢で喰べる場合等について異なる「喰べる」と云ふ動詞が用ひられ、一般的な「喰べる」と云ふ動詞はこれを見出すことができない*。動詞に於てのみならず物の名に於ても微細なる區別に對して一々異なる名を有するに拘はらず、例へば椰子の樹、アカシヤの樹、鸚鵡等の如き類名を缺く場合は至るところに見出される**。ハムマアによればアラビヤ語の如き相當發達せる言語に於てもそこでは例へば駱駝と云ふ類名を缺き、これに反してその雌雄老若、身體的特質、發育狀態等に從つて少くとも5744個の異なる命名が區別せられると報告せられた***。

* Trumbull, Traction of the Americ. Philol. Association 1869/70; Powell, Introduction to the study of Indian languages, 61; Boas, Handbook I, 807, 902.

** Sayce, op. cit. II, 5; v. d. Steinen, Unter den Naturvölkern Zentral-Brasiliens, 84.

*** Hammer-Purgstall, Das Kamel, Denkschriften der Kais. Akad. d. Wiss. zu Wien, Philos.-histor. Kl. Bd. VI u. VII.